

551

137

赤穂義士

卷下

小林營里著

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4

始



赤穂義士



下卷

小林鶯里著

社寄贈本

大正
15. 5. 1
寄贈

はしがき

壯烈又壯烈天地も爲に感じ。悲愴又悲愴鬼神も爲に泣くもの
 は、元祿に於ける赤穂義士の快舉である。我邦復讐の事蹟幾百
 を以て數ふと雖も、時の古今を論せず、人の齊しく仰ぎ見て生け
 る龜鑑と爲すものは、これ赤穂義士ではなからうか。更に謂ふ、
 彼の行動は日東男子の精華である、武士道の典型である。先人
 此舉を録し傳ふるもの枚舉に違ない、敢て予の拙著を俟つの要

赤穂義士(下巻)目次

三村次郎左衛門(包常)……………一
 潮田又之丞(高敷)……………二
 赤埴源藏(重賢)……………六
 堀部安兵衛(武庸)……………六
 不破數右衛門(正種)……………一〇一
 近松勘六(行重)……………一四〇
 富森助右衛門(正因)……………一四七
 倉橋傳助(武幸)……………一五四
 武林唯七(隆重)……………一五八
 大高源吾(忠雄)……………一六〇

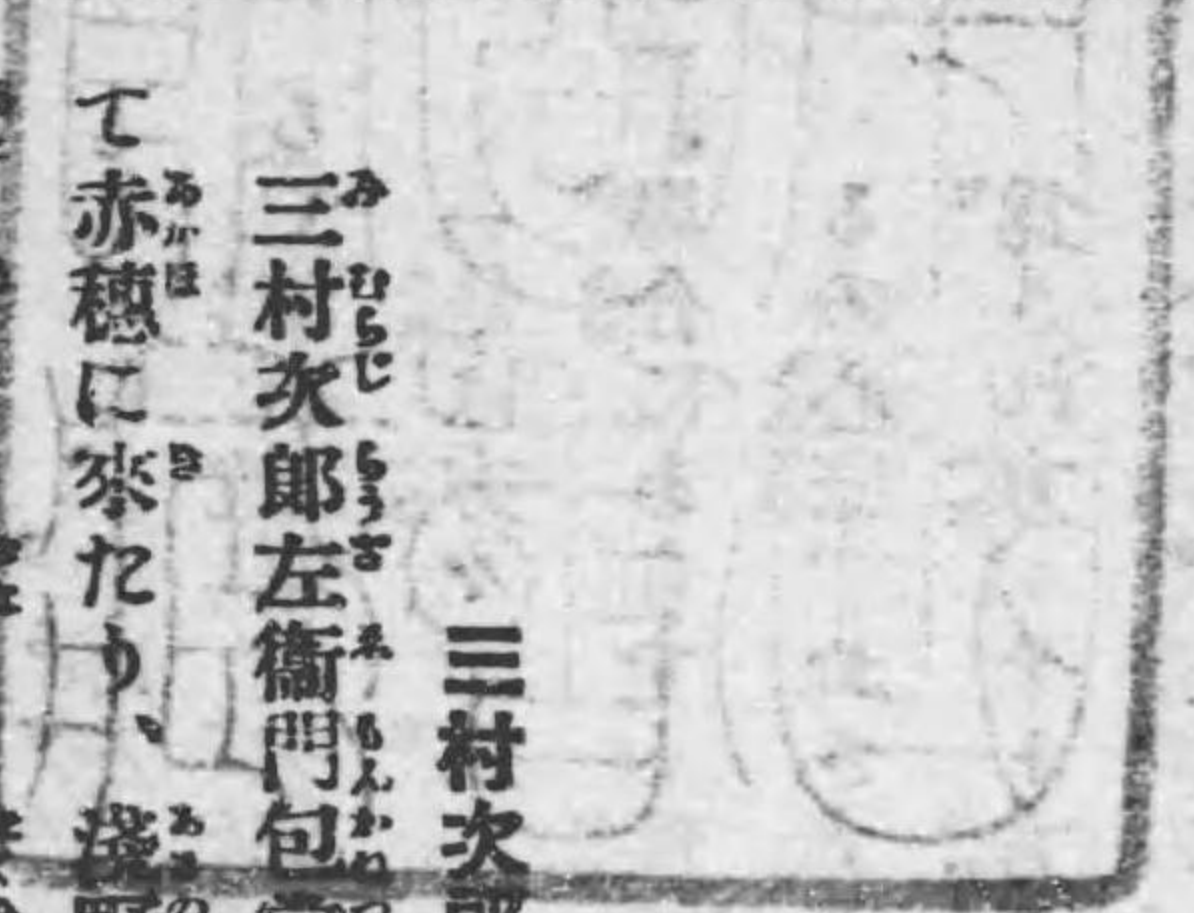
はなからう而も其の二三を除く外は廣唐無稽でなければ俗説探るに足らざるもの多く此千古の美譽を傷つくるなきやの疑義を抱く程のものさへある。本書必ずしも義士の眞を傳へ此舉の實を叙したと云ふのではない。其の歴史的研究は他日に譲り努めて通俗的に顛末の梗概を叙述したものである。幸に一般家庭の播讀を俟つ。

小林 鶯 里

矢田五郎右衛門(助武).....	二〇八
杉野十平次(次房).....	二一四
大石瀬左衛門(信清).....	二二六
磯貝十郎左衛門(正久).....	二四四
岡野金右衛門(包秀).....	二四九
間新六(光風).....	二七〇
勝田新左衛門(武堯).....	二七五
矢頭右衛門七(教兼).....	二九二
大石主税(良金).....	三二〇
寺坂吉右衛門(信行).....	三二二
萱野三平(重實).....	三三八
義士の切腹と餘聞.....	三三六

瑤泉院.....	三四六
義士の石碑.....	三四七
浅野大學.....	三五〇
勅語を賜はる.....	三五二

目次 (かほり)



赤穂義士 [下卷]

小林鶯里 著

三村次郎左衛門包常

三村次郎左衛門包常は、常陸國稻田の人、彦左衛門の子である。父の代に始めて赤穂に來たり、淺野家に召抱へられて家臣となつたのである。次郎左衛門は其後を承け、同じく内匠頭に事へ、臺所小役人を勤め、其祿高分限牒にも載せられぬほどの小祿であつたにも拘らず、大義の赴くところ身命をも辭せぬの覺悟が深かつた武士であつた、爲に主家凶變の際の如き、卒先して義盟の列に就き、以て君侯が平生の恩願に報ひんとしたが、何分にも七石二人扶持といふ極めて小祿の

本書御讀了の諸君は

赤穂義士 上卷 一、三〇

赤穂義士 中卷 一、三〇

右御購讀を願ひます。

事ゆゑ、他の同志の人々に充分の信を置かれなかつた。で、會議の度ごとに彼は何時も出席するが、多くは秘密の相談となると組除にされたのである。其盟書血判の當時、例の通り彼は忠實しく諸士の間を往復して、頻りと立ち働らいて居たが、やがて盟書が諸士の前に擴げられて、各人たがひに私語きつゝあるところに、次郎左衛門が進み寄るや、急に其の書を掩うて傍に押匿した。是を見るや流石温厚の次郎左衛門もムツとして色を作し、

「是は方々の爲され方とも覺えませぬ、今日は身の貴賤、祿の高下を論すべき場合にあらすと豫てのお達し、拙者不肖にして小祿ではおざるが、忠義を存するの心底、おさく貴殿方に劣らうとは存じませぬ、それにも拘らず、唯今の爲され方、チト方々のお身に似合はぬ致され方、近頃以て甚だ心得ませぬことでおざる。是非に今日は拙者奴をも連判に御加へ下されたう御願ひ申す」と熱心に溢れての懇願に、一同も成る程と思つて、互に顔見合せた。時しも

次の間に居つた内蔵介が是を聞いて、

「三村次郎左衛門の申す所、尤も至極のことでおざる、連判に御加へなされよ」と命じたので、包帯直ちに同盟中の一人となることを得た。これほどであつたから内蔵介も深く其の節義に感じ、厚く彼を遇したので、彼も益々粉骨碎身して一擧の爲めに盡瘁したのである。彼は人となり誠實律義、毫も嘘偽を銜ふやうな浮薄の心などなかつた武士である、其の如何に篤實であつたかは、彼が知友の許に寄せた手束によつて明らかである。

大石内蔵介殿巳の四月十六日、遠林寺に御越被成候て、夜七つ時に私儀を御居間へ被召寄、御申被成候は、其方事家中人多き内に、祿輕き者の儀に候處、親より相勤申候厚恩を感じ、必死の志儀承届、扱々家中に侍も多き、其外御恩澤の者共數多有之候處左様成儀は不申及、結句身の爲に見苦敷體不及言語候、然處其方忠節ひとへに志深く候事、神以拙者心底も恥敷ほどに存候

存寄之通にも相叶候は、其方儀は何卒惠遣申度由、吳々御申被成候、承届誠に輕き私儀に御座候處、御捨不被成、只今の御意辱次第感候へば、涙ぐみ御返事も不申及候同五月十八日領内之帳面引渡相濟、只今迄首尾能相勤候奉行小役人其外輕き者迄、内藏介殿爲御禮魚類之御料理御申付、相濟申候て後、侍中迄の御居間にて一人づ、御禮有之、金子杯被遣候、其外之面々は書院にて一勢一同に御祝被成候よし、田中清兵衛殿披露之上被申渡候、私儀は侍並に御居間にて御傍へとくと御呼被成候て、御申候は、其方事一人にて何廉大勢之世話、その上只今迄晝夜之勤勞一々見届、於拙者満足申事に候、何卒取續候様に致度候へども只今の拙者事に候間、寸志迄に候、兎角いか様致し候てなりとも、取續き見申様にと御申、御手自金子被下候、右御申聞の趣身に餘り忝存、直に御禮難申上、間瀬久太夫殿を以て、御禮申上候以上。

三村 次郎左衛門

野々村平右衛門殿

斯くて彼れ次郎左衛門包常は、赤穂退去の後、其の妻子を處置して一擧の爲め活動するに累を及ぼさいらしめ、而して京都に出で、依然内藏介が幕下にあつて忠勤を勵んだ。さるほどに期やうやく迫つて十五年の十月となるや、彼は内藏介の東行に従つて同じく江戸表に出で、時に町人嘉兵衛など、稱して、多く敵讐の動靜に備へて居た。

其の江戸に居た頃の話である、彼に就いて面白い俗傳がある、というのは彼が吉良家の探偵に従事して居た處から、其の身は檻樓半天を纏ひ薪割に假装して、日々松坂町から相生町、さては縁町界限を徘徊し、大割小割の二挺の斧に薪割臺を結び着けて、

「薪割はよしかな、薪割はよしかな」
で流して歩いた。處が一日、丁度用事あつて神田柳原河岸までやつて來ると、

當時研師として少しは人に知られた竹屋喜平次光延といふ老人があつた。其の店先を次郎左衛門が通ると、

「オイ薪割さん、二三本お願ひ申します」

と呼止めるので、

「畏つた」

と次郎左衛門、木戸口から裏庭へ廻ると、やがて物置から大材ものを出して來て、

「薪割屋さん、是をお頼み申します」

といふので、次郎左衛門、

「承知いたしました」

とばかり、其の瘤々だつた大材ものを、臺の處へ立て、置いて取り上げた柄の長い大割を太上段に振被るや否や、

「エイツ、ヤツ」

との掛聲もろともスポーン、物の美事に眞二つになつて左右に飛散つた。すると又一本前のやうに立て掛け置いて、

「エイツ、ヤツ」

劍道の腕前を以て薪を割るのだから、實に美事なものだ、それをば向ふの仕事部屋で、苦い顔をしながら弟子の仕事に世話を焼いて居た喜平次光延、次郎左衛門の割方に思はず見惚れて居ると、此方は包常、薪を立て掛け置いては、

「エイツ、ヤツ」 スポーン。

「エイツ、ヤツ」 スポーン。

「エイツ、ヤツ」 スポーン。

「ウムー」

喜平次老人呻吟り出した。すると又、

「エイツ、ヤツ」スポーン。

「ア、美事く、薪割の名人だなア」

と覺へず口へ出ると、それを聞いた次郎左衛門、

「主人、ほめてはいかぬ、譽められると氣が抜けるから」

と笑ひながらも、

「エイツ、ヤツ」スポーン。

「ウム、實に甘い、上手だ、構はず其處らにあるやつを、片つ端から割つて呉れお前がエイツ、ヤツ、スポーンと割ると、何うも何ともいひやうのない快い心持、溜飲がグーッと下つて胸が清々する、サア構はずやつて呉んな、お前さんの薪を割るのを見ると、醫者にかゝつて薬を飲むよりやア快い心持だ、モット割つて呉れ」

「ハイ、畏つた、エイツ、ヤツ」

「甘い、其處だ」

喜平次光延、次郎左衛門の掛聲に夢中になつて、思はず持つて居た煙管の雁首で弟子の頭をボカーリ、驚いたのは弟子だ、酷い親方があればあるものだと思はれて居る、其の中に薪も宜い加減出来たので、

「サア薪割屋さん、ソコで二三把割つたら此處へ来て一服おやり」

といふので薪割の次郎左衛門も、

「有難うござる、一服やりませう」

と茲で一服二服吸ひつけてスバくやつて居る。

「薪割屋さん、お前の割方には實に感心したよ、それにお前の割方が一風變つて居るから餘程面白い、これから何うだい、お前の方の都合が宜かつたら毎日今時分来て呉れないか、そして翌くる日の焚く分をくくと割つて行けば宜いから」

「ハイ、それは何うも有難いわけで、ナニ都合も何もありません、では明日から毎日上ることにいたさう」

「それぢやア今時分來ての、晝飯を家で上げるから辨當を持たずに來て呉んな」
「有難うござる」

と次郎左衛門禮をいひながら不圖見る氣もなく仕事場の中を見ると、喜平次の弟子が五六人、セッセと長い刀短い刀、いろくなのを砥石にかけて居る。見ると何といつても元が侍だから堪らない。

「時に失禮ながら、一番右手の方で研いでいらつしやるのは、備前ものでございますかの、あれは斬れるでせうな、次のは相州ものでございますか、新刀らしいが」
などやり出したので、

「ヤー薪割屋さん、上手だな、何うも驚いた、お前さん此方をチト手掛けた事

でもあるかい」

と竹屋の老人不思議に思つて聞く。次郎左衛門も是はしまつたとは思つたが、其處は何氣なく、

「イヤ何ういたして、實は私の家の前に道具屋がありましたな、雨の降る日など遊びに行つては、是が備前ものだとか、是は相州だとか、斯ういふこみの鑑を入れたのは何時代のものだとか、まア門前の小僧で、自然に覺えたのでからもう……」

と逃げやうとしたが、ドッコイ喜平次だつて眼がある、

「なるほど、しかし然うぢやアあるまい、お前さんの様子を見る所が、今は襦袢半天に身を纏うてこそ居れ、素は立派なお武家さんだらう、俺は人の眼利が自慢の男でな、大概斯うと見込をつけたら外しつこはねへ爺なんで……何うだ
い驚いたらう、素は確かに武家だ、それに違ひあるまい」

目星をさゝれたので思はず包常ギツクリしたが、

「イエ何ういたしましたして武家所ぢやアございませぬ、播州赤穂は在の田吾作な
んで、兄弟が五十三人あつて、食ふに困つた擧句斯うして江戸へ出て参りまし
たが、別に田舎ものゝことゝして錢取は知らず、據なくまア斯うやつて薪割
をして居るやうな私でハイ」

「冗談いつちやアいけねへ、いくら兄弟が多いつたつて、二十鼠ぢやアあるめ
へし五十三人なんてあつて堪るものかい、何でもお前さんはお武家に違えねへ」
「イエ、決してそんなものぢやありませんお武家なんて途方もない」

「イヤ、何うしても侍だ、侍に違えねへ、斯うと俺が思込んだからにや決して
外れつこはねえんだ」

「五月蠅ッ、それほど迄に聞きたくば、名乗つて聞かせるほどに能つく聞け」
「そりやこそお出でなすつた、多分さう來るだらうと思つて待つて居たんだ、

サア耳を堀じつてお聞き申しやせう」

「宜しい、そも遠き先祖を尋ねれば、大職冠藤原の朝臣鎌足公の流を汲む淡
海公の二十四代の何とかで、何とかく平家の方に名を得たる、侍大將の一
人悪七兵衛景清とは拙者のことだ」

「冗談ぢやアねへ、落し話を聞くやうだ、何ぼ何でも景清が、今時なんで薪割
になつて居るもんか、まア隠し立てせずについて御覽なせえまし、決してお前
さんの御迷惑になるやうなことは、憚りながら此の竹屋喜平次、首にかけた
つていはねへ、まア言つて御覽なせえまし」

「イエ、何ういはれても百姓は百姓なんで……」

「さうかい、然う隠すなら強つてとは云はねへ、しかしお前さんの名を何とい
ふんで……」

「私は次郎つていふので」

「それぢやア薪割屋の次郎さんか、マア何でもいふ、明日から間違えなく来て呉んな頼むよ」

と其處で薪割屋の次郎の次郎左衛門は大きに喜んで、以來毎日／＼竹屋へやつて来ては、

「エイツ、ヤツ」

スポーン／＼で薪割をして居たが、何さま心ある武士の彼れ次郎左衛門包常、いよくといふ時には此の名人に一刀を研がせた上、充分の働きをしやうといふ考へ、とは知るに由ない竹屋の老人、其の割方を見ては子供のやうに喜んで居たが、或る日のこと廻り所でも多かつたか、少しく毎時よりは刻限が遅れてやつて来た次郎左衛門、

「今日は結構なお天気で……」

「ヤー次郎さんかい、今日は何うして遅くなつたんだい、實はモウ来さうなも

のだと待つて居た所だ、マア一服やつて、又一つ願はふかな」

「ハイ、有難うございます、ナニ少し廻り處があつたものですから、つい遅くなりましてへい」

と挨拶しながら向ふを見ると、立てかけてある大きな看板、

「親方、大層立派な看板が出来ましたな」

「ナニ立派といふほどでもないが、削りはよく削つてある」

「なるほど美事なものだ、して親方、これへ何と書くので」

「御刀研 上所、協へ竹屋喜平次光延と書けば宜いので……」

「で、書くのは何誰で」

「別に誰れといふこともないが、よく方々の看板にある、丸い字は書いて貰ひたくないのね、しかし其様な事をいつちやアチョツクラ書いて呉れる人も見當らないので據るなく此の先の御家流のお師匠さんにやつて貰ふ積りて、先刻

から小僧に墨を磨らして居る處だ」

「なるほど」

と看板を見詰めて居た次郎左衛門の薪割次郎、當時人に知られた書手で、淺野の家中は勿論、本家安藝守の藩中にも聞えたほどの手を持つて居るといふ腕だから、書きたくなくなつて手がムヅクして來た、

「親方、何うでせう此の看板を私に書かせては呉れませんか」

「お前が書く……お前が……」

「何うでせう」

「此の看板へ書かうといふのかい、フム、だからお前さんは他に本名があらうと何時か私がつたんだ、本當に何ていふんだい薪割屋さん、お前さんの本名は」

「本名は悪七兵衛景清でさア、其の他にやア薪割屋の次郎」

「オイ、落し話ぢやアねへ、しかし書きてえといふならやつて見な」

「宜うがすかい、やらせて下さるんで」

久し振りに大きなものが書けると喜んだ次郎左衛門、いづれ近い中に自分は死ぬ身だ、何うせ死ぬなら何か一つ此の世に遺して置きたいと思つたが是を幸ひ、此の看板に自分の腕を振つて置かふと悦んだ彼は、ツカ／＼と仕事部屋に上りこんで其の看板を手許に引き寄せ、ビタリ腰を下してヂツと構へた其の體の様子、襦袢半天こそ身につけては居れ、何となく犯し難い姿に、仕事をして居た喜平次の弟子達も驚いた。其の中に小僧が大きな硯を持つて來たので、

「親方、表は楷書で書いて、裏は草書にしませうかね」

「宜からう、しかし表の楷書は宜いが、裏を雙紙にしないやうに、清書でやつて呉んな」

「洒落をいつてらア、しかし宜うがすね書きますせ」

と、キツと看板に目を注いで筆にタツプりと墨汁を含ませた次郎左衛門、墨痕鮮やかに御刀研上所と書いた其の筆の美事さ、脇へ持つてつて竹屋喜平次光延と書き終つて、ヒラリと反した裏の草書、一筆書きにサラ／＼サツと走らした所實に活々して見るからに心持の宜い出来、

「親方どうぞごさいませう、是で御抄辨が出来ますれば、お店に掛けて置いて貰ひたい、いけなければ削らしてお家流のお師匠さんの所へ……」

「イヤどうして／＼、甘い、實に甘い、明き盲目の私が見ても字が動いて出さうな鹽梅、眞たく美事なものだ」

と喜平次老人、ホク／＼してゐる、側に見て居た四五人の弟子共も、

「どうだい甘いぢやアねへか」

「ウム、眞つたく甘い、あの薪割めアンなに甘く書かねいでも宜さうなものだになア」

「然うよ、襪樓半天を着て居やアがつて、アンなに甘く書くにやア及ばねへ、こんな入らざる世話の心配をしてゐるのもあれば、

「彼奴、字をアンなに甘く書く癖に、何で薪割なんぞして居るんだらう」

「ナニ彼奴、屹度お目出度ほうなんだらうお人好しに違ひねへ」

など／＼ヒソ／＼悪口をいつてるのもある。次郎左衛門だとして耳に這入らないではないが、燕雀何ぞ大鵬の志しを知らんやで済したものの。やがてコン／＼に暇を告げて其の日は立歸つた。そこで其の翌日から件の看板を表にかけた處、間もなくやつて来た一人の侍、是は何といふ人が書かれたものか是非共流名を承りたい、又眞筆の手本を申受けたいなど、尋ねる、それが次第に殖えて遂には日に三四人を數へるやうになつたので、サア竹屋の老人が威張り出した。

「憚んながら俺の所の看板は日本一だ、此方が楷書で此方が草書といふんで誰が侍で楷書と草書の區別を知らない者があつてもぢやアない、兎に角それが

江戸に名高い看板になつた。是が後に村松三太夫の柱取と共に、竹屋の秘藏物になつたといふ俗傳がある。

茲に討入當時、彼れ次郎左衛門包常は、淺黄の下着に黒小袖紅表黒羽織とも裏筋金入りの小手臙當をつけて、三尺有餘の強刀を腰にし、吉良家の裏門にと立向つた。此の門のさまで堅牢でないことは、日頃から見分めてあつたので、

「東組に後れるな、それ打破れ」

といふ號令の下から、彼は杉野十平次次房と共に、

「承る」

と應じながら、大槌を揮つて鋭々聲に打込めば、もとより大力の勇士等が、精神こらして下した槌に、扉は忽ち四離滅裂、得たりとばかり飛び入つたる次郎左衛門は、其の儘後をも見ずして邸内奥深く躍り進んで行く折しも、吉良家宿直の侍一人、切先鋭く其の面前に立ち塞つた、と隙間もなく駆け合せたる彼は、二

太刀三太刀合すと見るより早く、チャリリ引外して置いてその腰車を丁と斬り返す刀に胸元深く貫いたる其の働き、水際だつて衆中に見え渡つた。

斯くて首尾よく昔年の怨を解け行く雪のそれと共に霽らし終ふるや、彼は水野邸に九人の同志の士と同じく引取られて、茲に三十七歳を此の世の名残り、稻垣佐介の介錯によつて美事乃珊瑚劍信士の法號と化したのである。

潮田 又之丞高教

潮田又之丞高教が家は、世々赤穂の藩士であつた。又之丞の代になつて、馬廻に列し、二百石を食んで、故内匠頭長矩侯に事へて居たが、同時に國繪圖奉行と加東加西兩郡の郡奉行をも兼務して居た。彼れは早くよりして、彼の大石内蔵介や、同苗瀬右衛門等と共に、當時關西きつての劍客、讃州高松の奥村無我の門に入つて、斯道の蘊奥を極めた、従つてなかくの遺手であつた。

彼について、亦一の俗傳がある、よく小話や講談などにいはれてあるものだが、故内匠頭がまだ在世の頃、一日梅見にとて騎馬で唯一人、堀部彌兵衛を連れてお出ましになつた。處が此の彌兵衛金丸、なかくの馬術自慢なので、いろくつと其れについての講釋を道々説き初めた。然るに内匠頭も亦それに敗けぬ天狗なので、二人の間は何時か議論の花が咲き出した。主従隔てぬ間柄の二人、馬の上で互に喋舌り散らして居つたが、やがて彌兵衛が内匠頭に向ひ、

「殿が如何やうに仰せられましたも、俗にいふ大名乗り、御指南番が、上様は御上達なされたと申上ぐれば、それを實くと思し召されますやうな、所謂大名藝では、甚だ以つて……」

「何ぢやと、大名藝だ」

「左様で、其處へ參ると斯く申す彌兵衛の如きは、實地に就いて練習仕りまして鍛へに鍛へた腕前、殿に優るとも、ゆめ劣らうとは存じませぬ」

「コラく彌兵衛、天狗は好い加減に止めい、其方が假令何と申さうも、論より證據といふことがある、是より彼處の梅林まで互に駈け競べをした上で、兎角の自慢をせい」

「宜しうおざりまする」

「若も其方が萬一手に乗り勝つならば、此の印籠を褒美として其方に遣はす」

「それはく、彌兵衛身にとりまして有難く存じまする」

「禮ばかり先に申して、其の鼻を折られまいぞよ、もしも此の長矩に及ばなければ、以來予が面前に於て、決して一言たりとも馬術の自慢はさせんぞ、よろしいか」

「畏りました」

と、天狗同志が駈けつくらを初めた。ハイヨーくつと口取も連れず、主従兩名幕地に砂煙りを揚げて馬を飛ばして行く。根が利かぬ氣の内匠頭、

「彌兵衛、恐れ入つた方がよからうぞ」

「イヤ何う仕りました、上こそ途中に於ていつそ御印籠を下し置かれました方が宜しからうと存じます、彌兵衛の馬は御覽じませ、これ斯様に生きて居りまする」

「馬鹿を申せ、予のぢやとて生きて居るぞ何うだ」と互に勝手な事をいひ合つて居る。

「殿、私めは一足前に參着仕り、御待受け申上げるでおざれば、恐れながら殿にはさのみお急ぎなうボツ〜とお出で遊せ」

彌兵衛の馬が、内匠頭のより少し前へ出ると、鼻たか〜と斯ういふ。すると負けぬ氣性の内匠頭も亦、

「黙らんか彌兵衛め、僅かに先へ出でたりと申して……よし其の義ならば目も物見せてくれん、覚え居れ」

といふ中に、此度は内匠頭の方が少し前へ出る、と待ち構へて居た長矩、

「コリヤ彌兵衛め、其の高慢の鼻を如何にした、降参せい」

「イヤ、殿のお言葉なればとて、彌兵衛も武士、降参などは決していたし申さぬ」

と双方負けず劣らずに云ひ合つて、トットツ〜と馬を駈けさせて居る。然るに何うした事か、やがて内匠頭の馬が、一聲高く嘶くや否や、棒立に立ち上つたかと思つと、内匠頭を背に乗せたまゝ、暴れに暴れて馳り出したから、往來の者の驚きといつたら、ワーツワツといつて逃げ廻る、馬はそれに益々氣を得て、ひた走りに走つて〜走り行くので、流石の殿も今は一生懸命、鬘にシツカリと捉つて、其の體を馬の脊にくつつけるやうにしながら、唯々落ちないやう〜と齒噛みついて居る。と此の時、年の頃やうやく十四五になる一人の男の子が、眼病の老人の手を引きながら、

「伯父さん、危ないよ、宜いかい、大丈夫かい」

「ア、大丈夫だよ、お前が斯うして連れてつて呉れるので大安心さ、それにしても又坊、こゝは一體何處だい」

「此處はね、あの梅林へ處く往還だよ」

「オ、然うかい、それは存外早かつた、慣れたことなら杖にすがれば宜いのだけれど何うも俄盲目の悲しさには、何處が何うやらサツバリ見當がつかず、お前ばつかりが頼みぢや、それにつけてもお前のお父さん、思ひ出すのもお氣の毒なくらゐ、もとは立派なお武士でありながら、思はぬ不幸に主家御浪人、今のお母さんとお前と三人で、指折り數ふれば十年ばかりも前のこと、あの不動堂へ一宿したのが縁となり、五六年の間も堂守をしてお居で、あつたが、不圖したことから武士の意氣地、他國の渡り侍を三人までも斬り捨てたほどの、腕も達者な得難い御人、地頭様も是非にといつて、召抱へやうとなされたが、最

早二君には事へませんと断然お断をいつたくらゐ、實に見上げたものだつたが壽命は是非のないもの間もなく風邪の心地といつたのが原因となり、遂々死去なられてからといふもの、それや是れやが續き續いての不幸で、お母さんが長の病ひ、それを厭はず孝行するお前の心掛、晝は斯うして人の手引や使ひ廻り夜は夜で又看病薬の世話、僅か十四や十五のお前によくマア出来たものぢや、村中でお前を褒めぬ者は一人もありはせぬ、親御様のお教育が好いから、たとへ貧乏暮しをして居つたればとて、あの又坊の孝行ぶり感心なものぢやとな、本當にさういつて評判なもの」

と咄しく來かゝる。そこへ前にいつた内匠頭の荒馬が荒れて來たのだから堪らない、馬上の内頭匠も今は手綱を引き締めるどころか、たゞ、

「危ない、どげよッ」

といふばかり、後につき従つて來た彌兵衛も何うすることも出来ない、

「町人危ないぞ、怪我するなッ」

と流石の天狗も蒼くなつて喚くのみ。此の聲を聞いた件の盲目、アツといつたきり逃げるも何にも出来ないから、ペタリとそこへ尻餅をついてしまつたので、つき添の子供も今は何うすることも出来ず、アハや此の儘盲目の老人は、荒馬の蹄にかけられることかと思ふ其の折柄、ヒラリ身を躍らして馬の行手に突立上がつて大手を擴げた少年、飛び来る馬の蹄をサツとよけ流しざま、突然鞍のあたりに左手をかけた、と右手は何時かその轡にシツカリついて居る、ドツ／＼トツトツと五六間も引き摺られて行く中に、早くも噛み込んで居た轡を外してしまつたから、流石の荒馬も少々勝手の違つたものか、ビタリ其の足搔を止めてフ／＼と地息を臭ぎ出した鹽梅、馬上の内匠頭もホツと一息ついて、直様其の手當をしだしたので、小供も其の儘手を引いて、

「伯父さん、吃驚したらう、怪我しやしなかつたかい」

「ウム、別に怪我もしないが、此の通り目が不自由なものだから、一時は何うなることかと、私は本當に驚いてしまつた」

「さう、それやア宜かつた、本當に近頃は城内から、無暗矢鱈にロク／＼馬に乗ることもしらない沈竹侍どもが、遠乗にボカ／＼出て来るから、危なくつて堪つたものぢやアない……オイ馬の人、もう些と馬に乗ることを覺てから遠乗に出てお出で、一體よくも乗れないで、そんな生きた馬なんぞに乗るから悪いや、死んでるのかさもなくなれば木の御馬でも歩よさして貰つてればいふのに、本當に危なくつて仕様が有りやアしない」

是を聞いて驚いたのは内匠頭だ、五萬三千石の主人として生れてから今日まで斯様悪態を吐かれたのは是れが始めてだから、呆氣に取られて眼ばかりバチクリ／＼、流石に言葉も出ないで居る。ところへ彌兵衛が大汗ダク／＼で飛んで来るや、今の小供の悪態だから、

「コレ／＼小僧、何か無禮を申したやうであるな」
と、家臣の身としては黙つても居られないから咎めだつた。すると此の小僧、
なかくの剛情者と見え、

「何が無禮なんだ、無禮が無禮でないか、よく物を見てからいふが宜いや、無
禮は其方でしたんだらう、私は此の村の者だが今この伯父さんの手を引いて此
處まで来ると、此の下手くその馬乗りが此處へ飛んで来やアがつて、スンデの
ことに私も此の伯父さんも馬に蹴とばされてしまふところだつたのだ、若し蹴
られ處でも悪かつて御覽それこそ大變が出来るぢやアないか、一體馬に乗るな
ら乗るやうに、チャアンと習つた上で来たら宜からうに、あの乗りざまつたら
何だい、それで無禮が開いて呆れらアねえ伯父さん、さうだらう」

「コレ小僧、なるほどいふ處は道理ぢやが少しは人の見分けもつけていふもの
だ」

「なんだつて、人の見分けをつけていへ、つけたりやこそ斯ういふのだ、これ
が上手な人なら、何で私が愚圖／＼いふものか、下手だから下手だといつたの
だ、それも無理をいつたのぢや此方が悪いが、道理は道理だ私がいつた通りに
違ひなからうぢやアないか、人面白くもない、侍だつて何だい、ねえ伯父さん
本當に危なかつたねえ、尻もちをついて嘔痛かつたらう、歩けるかい」
と甲斐／＼しく件の老人をいたはりやる様子に、其の言葉といひ、仕草といひ
少なからず内匠頭の氣を引いたものと見え、

「コレヤ彌兵衛、予が直き／＼に尋ねたい儀がある故、其方暫く遠慮をせい：
コレ／＼小僧、此處へ參れ、予が些と話したいことがあるによつて、ズツと
是れへ進めい」

「何か御用ですか」

「其方は愛い奴ぢや喃う、先刻其方が身共の荒馬を止めた腕前、なかく馬術

の心得があるらしいが……」

「戯談いつちやアいけません、馬の術なんて丸ツきり知りやアしない、けれどもお父さんが生きて居る時分聞いて置いたのに若し疝強い馬が暴れたら、手を擴げて其の前の處へ立ち、轡を取つて疝に障らないやう、外してやりさへすりやア、自然に柔しくなるといつたので、其の通りに今やつて見たまでです、お前さんもモウ少し上手になつてから、獨り歩きをなさるが宜い、馬丁なしぢやまだく何うして危ない」

と無遠慮の子供の咄しに、傍に居た彌兵衛は癢に障つたか、

「コレ子僧、氣をつけて口を利け」

「ナニ、よく氣をつけて口を利け、最前から色々なことをいふ爺だ、私だつてもとは待の子ぢやアあるけれど、今は村方住居をして、毎日人の手引きや何かをして、辛と其の日くくの煙りを立てゝゐるやうな何にも知らない者だもの、

氣をつけて口を利けなんていふお前こそ、人を見て法を説けといふこともあるから、氣をつけるが宜い」

「なんぢやと、イヤなかく口の減らない子僧奴だ」

と一本突込まれたので流石の彌兵衛、此處少々タヂノの體で捨鉢の一言吐いて頭かきく。内匠頭はいよく感心をして、

「なかく賢い奴ぢや、して其の方は何といふ姓名ぢや」

「お侍、あんまり威張りなさるなよ、いくら今になつて剛がつても、先刻の様子には彼りや何だい、其の方もないもんだ、馬に乗りそこなつて、助けてもらつた癖に、有難うとも何とも禮をいはず、おまけに大きな口をズベくと吐いて……本當に呆れ返つて口が利かれやしない、そんな了簡だから馬だつていふことを氣かないのだ」

傍から彌兵衛が又槍を入れた。

「コレ小僧、其の方と仰せられても大事な御方ぢや」

「大事なからうが有らうが、私の知つたことぢやアない、サア〜御免だ、伯父さん遅くなるといけないからもう行かふ」

と老人の手を取つて子供は立ち去らうとする。内匠頭は益々其のいふ處に感心して、

「コレ〜、其方の名は何と申す、聞かせいコレ子僧」

「又市ツていふんです、サア伯父さん行かふ、大變手間取たから」

と後振向きもせず行かふとするので、先の老人も見るに見かねて、

「又坊、そんなにツンケンいふもんぢやアないよ、お侍といへば有難いものでお前の死んだお父さんなぞも大した侍だつたのだよ、仔細あつて御浪人にこそなつたれ、それやア能く物の解つた方で……併し惜しまるゝ人は早く死ぬで、いまでも村中で理屈の分つた人間は、皆なお前のお父さんに育つた人たちばか

りだよ、それくらゐだから、何もそんなにツンケンするものぢやアない」

「伯父さん駄目だよ、そんなことをいつたつて、馬にも乗れないやうな侍だもの、あんな奴に〜して堪るもんか」

「コレ又坊ツたら、そんなことはいふもんぢやない、お武家さまがあればこそ天下泰平國土安穩なので、それに取り分け此度お國替になつた御領主さまといふのは、大層お情け深い方だといふことだから、其の御家來でいらつしやるとすれば、上を學ぶ立派なお方、必ず疎忽なことを申すんぢやアないよ、それではモウ行くとしやうかね」

といふ兩人の話を一々聞いて居られた内匠頭、又市の何處となく非凡の風采を備へて居るに、熟々感心をして、彼れ貧苦の中に其の日を送り居るため、家庭の薫陶行き届かぬのであらう、さればこそ言葉のうちに自他の分別がつかぬ處もあるのだ是を立派に教育してやつたならば、定めし天晴れの武士ともならうと、

所謂、

つくらねど野に咲く梅の木振かな

で、實に末頼もしき少年よと、心中深く見込みをつけたものか、今彼方へ行かふとする兩人を呼び止めて、

「爺、近うまわれ、何を隠さう、予は内匠頭であるぞ、イヤサ長矩ちやぞ」といはれた。

「へー、あまり承はつたことのないお名前でござりまするナ」

と何にも知らぬ件の老人、いひ返すのを此方に聞いて居た彌兵衛、

「コリヤ御無禮を申してはならんぞ、これぞ當國御領主淺野内匠頭長矩侯であらせらるゝぞ」

と聞いた老人、いや驚くまいことか、

「へエ……と、とのさまで……へエ、コレ又坊、お前大變なことを仕出來して

お呉れた、お前が先刻から種々なことをいつたお方は、あのお殿様だといふこととちや」

「何だつて伯父さん、この方が此處の殿様だ、さうかい、それは些とも知らなかつた」

と澄したものの、ツカ／＼と内匠頭の前へ出て、

「是れは誠に相済みませんでした、何卒勘忍して下さいまし、つい御領主様だとは氣が付きませんものでしたから、平凡武士かと思ひ……」

「コラ／＼、またしても／＼平凡武士など、申して……扣へい」
目に角立つて彌兵衛が咎めるのをば内匠頭、

「イヤ彌兵衛捨て置け／＼」
といつて敢て意にも掛けず、

「コリヤ／＼又市とやら、心配するには及ばぬ、今日の無禮は長矩徹行のこと

とて悉く忘れて取らするほどに、何も案ずることはない、して夫なる眼病の老人は、其方と如何なる縁あつて、斯くは同行し居るのか」と聞き出された。件の老人はそれを引取つて、

「へい、冥加の至極でござりまして……百姓の身としてお殿様に直きくお答へが出来るとは譬になつても長生きいたしました甲斐がござりまするで、へい、私は御領内平井村の百姓松兵衛と申しまするもので、私の先代が不圖した誤りからお役を召上げになりましたから不幸つゞき、遂々只今ではホンの小百姓に御座りまする、また是に居りまする又市と申す小僧は、手前方の隣りに不動の荒堂がござりまして、其の脇の河原で敵討を遂げましたる勢州は松坂古田家の浪人で潮田主水と申す人の忘れがたみにござりまする、此の子の母と三人づれ、長らく村へ止めまして手習ひの師匠を頼んでおきましたるうち、先の御領主様よりは是非に抱へたいと強つての御仰せ其の時何うしても御辭退申し

て仕官をいたされません、出世になることを、なせ断らつしやつたかと私が後に聞きましたる時、貞女兩夫に見えず、忠臣二君に事へすと古人の教の通り、忠義をしたといふ程の拙者でもないが、義によつて人の爲めに敵を討つてやり其の又敵の弟子が三人、殊勝にも私を狙つたのを此の平井河原で殺してしまつて見れば、其の人々の爲めにも菩提を吊つてやりたい、それ故折角の仰せを背いて佛門に歸依すると、其からは朝に晩にお經三昧、日を送つて居られまする中、遂々なくなられました處、引き続きの不幸には其の連合が又長の病ひ、かたく私も眼病で此の通り、と申したやうな次第で、まア同病相憐れむで隣づからのことではありまするし、ますから、始終此の又市には使ひを頼みましたり、又私が外出でもいたしますときには、杖がはりに頼みましたりして居りまするが、至つての孝行者、チト氣風は荒々しうござりまするが、親に事へる孝行な柔しいところは、村中に又とない譽められ者でござりまする」

と親爺の話しに感心して聞いて居られた内匠頭、

「彌兵衛、愛い奴ちやのう」

と今更に又市の顔を繁ると見やる。又市は頻りにモヂくして、早く家へ歸りたいやうな様子をして居るので、見兼ねた彌兵衛は、

「コレく小僧、上がお言葉を下し置かせらるゝ間はヂツとして居らんか」と答めた。すると、

「ですけれども、御用がないなら早くお暇を頂きたうございます、私は家の事が案じられて堪らないんです、今頃はお母さんが丁度一度づゝ差込みの來る時分なんで、若し私が居りませんと、何んなに因るかそれが案じられて……」といふ中さへもモヂくして居る。

「オ、それは嘸かし困るであらう、毎日差込んで參るのかな」

「エ、いつも今時分になりますと、胸がキリく痛み出しますものですから、

又市や此處を押へて呉れろといふので、其處を私が押して上るんです、一人一役なんで、いくら何處にお使ひを頼まれましたも、此の時だけは断はつて行かないのでございます」

「なるほど、それは嘸かし困るであらう、遠慮はいらん、早く參つてやれ」

「有難うございます、ですけれども、此の伯父さんの手を引いて行つてやらないきやアなりませんから……」

「イヤそれは心配いたすな、其の老人は身が家來に同道いたさせて遣はさうから、とくく參れ、予もついでに其方が家へ赴むかうであらうぞ、サ早う參つて母を大事に看病いたせよ」

「ハイ有難うございます、そんなら伯父さん、後からお出でよ……、殿様、此の家來の乗つてゐた馬を借りて行つても宜うございますか」
聞いて彌兵衛は口アングリ、

「コレ小僧、此の方の馬に乗つて行つてしまつては拙者甚だ迷惑いたすわ」
「だつて今お前さんは伯父さんの手引きになつたんぢやアないか、手引が馬に乗つて居られるかい、杖の代りに成ンなすつたんぢやアないか」

「何を己れが……無禮ものめ」

内匠頭も可笑しくなつたものか、

「コリヤ、彌兵衛、宜いではないか、捨て置け、孝子に免じて無禮の言葉は深く咎め立ていたすな」

「ハ、ツ、是は恐れ入りましたござりまする」

彌兵衛は主人の云付だから仕方がない、其のま、縮々まつてしまふ。又市はヒラリ馬に飛乗つたかと思ふうちに、我流ながらも父の教を受けたけあつて、早い早くないの、雲を霞と行つてしまふ、彌兵衛こそ甚だ迷惑で、小僧のために警の手引をする上、自分の馬まで取り上げられてしまふ、斯様なつまらないこと

はないと、今更愚痴を滴したが追付かない。後ろ姿を見送つて居られた内匠頭は、やがて、

「ア、感心な奴だ、コリヤ松兵衛とやら、是より予は又市の家に寄る、其の方彌兵衛に連れられて案内をせい」

「へい、お言葉は誠に有り難う存じまするが、お上がお越しに相成りましても足踏さへ出来ぬやうな處、まるで犬の伏小屋同様でござりますれば、何うぞ其の儀ばかりは……」

「イヤ苦しうない、如何ほど穢うても心に錦を着たあの孝子の家ぢや、寄るぞよ、コリヤ彌兵衛、早う松兵衛の手を引いて取らせい」

「ハ、ツ、しかし私今年四十有餘歳、殿の家臣としての堀部彌兵衛金丸、如何に時とは申せ、警の手引をいたさせらるゝとは、イヤハヤ情けなき次第、彌兵衛、誠に身に取りまして……」

「アツハツハツ……、しかし時と場合なら詮方もないて」

「ハ、ー、左様でおざりますれば、此處より彼處までの間は手引も仕りまするが、彼の村内へ這入りましたならば、何卒御免を下されまするやう、人にでも見られましては、餘りに馬鹿くしうおざりまする」

「コレくさう愚痴を申すな、其方も義といふ志しはあらうがな」

「イヤ、誠に以つて、何の志がおざりませうとて、こればかりは何うも……實に弱りましたなア……コリヤ百姓松兵衛とか、君命ぢやによつて又市とやら申す小僧同様に心得、此の方の肩へつかまれい」

「へい、それは何うも有り難う存じまする、……ヤこれはいけません、お武家様はお脊が高すぎて手勝手が悪う……」

「人を杖の代りにまでいたして文句を申すな、一體小僧の宅も何方の方ぢや、其方は存じて居るか」

「へい私も何うも、俄盲目のことでサツバリ見當が分りませんで、へい、何んでも右へくと真直ぐかと覺えましたがな」

馬上の内匠頭が聲をかけて、

「彌兵衛、分らねば通行人に聞け」

彌兵衛ますく驚いて、

「いかに殿のお言葉とは申せ、私も盲目の手引をいたした上、道を聞きく参るとは餘りに情ない役廻り……」

と彌兵衛も愚痴たらしく、往來のものは是を見て、

「モシ何うやなア、今彼方に行きなはる、アノ何みんか」

「エライ面白い風やなア、一人は馬に乗つて居やはるが、何ぢやい、一人の侍は盲目の杖になつて行きなはるで」

「なるほど、こう真つ晝間狐につまゝれて行きやはるのやらう」

「あの侍も嘸愚痴いふてのやうナア」

「何ていふてるのや」

「アレが侍だつしやらう、片ッ方が按摩はんと来て居ますやらう……ソラつりあひが悪いやら」

「左様よな」

など、笑つて居る。

此方は彼の又市、今しも息せき切つて駆けこみ見ると、毎時の時間で母が持病の差込み、前にうつぶし齒を食ひしめて居る、驚いた倅の又市は、

「何うも蟲が知らせた、斯うだらうと思つたに、餘計な侍め手間を取らせやアがつて家ちやアお母さんが此の苦み」

と早速の手を盡した合抱に、

「オ、又市かい、いま歸つて来ましたか、今日はいつともより遅いので、松兵衛

さんのお體に怪我でもあつたのではなからうかと年寄りの取り越し苦勞をして居ます中に、急に差込んで来たので……」

「ハイ左様でございますか、ではお薬をお飲んなさいまし」

「オヤ、モウ薬はなかつた筈だが」

「左様でございます、切れて居りましたからお隣りの伯父さんの手を引きながら、玄伯さまから頂いて參りました」

「さうかい、道理で道が手間どつたと思ひました」

「イ、エさうぢやありません、途中で馬乗りの侍が馬を怒らしてしまつたもんですから、隣りの伯父さんも私も濟んでのことで飛んだ目に遇う所、でもお母さん、今日といふ今日は死んだお父さんの教へられた通りやつて、飛んだ譽れを取りました」

「オヤ、それは何うおしだといふのだエ」

「馬の外れたときは、前に廻つて馬に逆らはないやう轡を取つてやりさへすれば、直ぐ静まると仰しやりつけの通りやつて、其の侍の危なかつたのを幸と免したんです、すると其の侍めなかくに威張つた口を利くんです、それからねえ、だんく話が進みましたらやうく分りました、アノー淺野内匠……の頭……何とか矩とかいひました」

「エ、それやアお前、今度お國がはりになられた先殿様の若様ぢやアないか
エ」

「エ、何でもついて居る侍も、上だの殿だのと云つて居ましたが、私は助けてやつた恩人なのですから威張つてやりました、此の下手くそ馬乗りめ、活きた馬に乗らないで死んだのに乗れつて云つたんです」

「マア此の子としたことか、そんな御無禮を申すものが何處にあるものかね、お前ばかりか松兵衛さんまで屹度お上のお怒りに觸れ、何んな咎を仰せつかる

か知れませんかよ」

「イ、エ、それがねお母さん、なか／＼分つた人なんです、怒りませんの、私は忍びぢやから其の罪は問はん、忘れて取らすつて云はれました」

「オヤ然うだつたかい、連合も始終いふてゝあつたが、今度此の國がへになつてお出でになる淺野といふ殿さまは、お大名中の名高いお方とやらいふてお居でなすつたが……それは然うとお隣りの伯父さんをお家へお送り申したかえ」

「イ、エ途中にはつといて私ひとり駈けて戻つて参りました」

「ソレは其方にも似合はぬ亂暴な、お前が先へ歸つてしまつては、目が御不自由な伯父さん、何うして戻つて來られます」

「それはお母さん、御心配には及びません後から彌兵衛といふ人が手を引いて來ますから」

「其のお方は……」

「矢ッ張り殿さまの家來で立派な侍、それに殿さまも御一緒で來るといつて居られました」

「エ、それではお上は松兵衛さんの家へお成りがあるのかい」

「イ、エさうちやありません、私の處へ來るッていはれました」

「それではこんな破ら屋へ……」

「エ、私もそれは斷つたんですけれど、イヤ苦しい、たとへ如何なる茅屋でも心に錦を着た其方達親子の住居をいたす處、決して案じるには及ばぬつて殿さまが直きくにいはれました」

「では私たち親子の身の素性をお前いつたのかへ」

「イ、エ私アいひませんけれど、みんなお隣りの伯父さんが喋舌つてしまひました」

「それでは松坂は古田家の浪人潮田主水といふことを」

「ハイ」

「それは飛んだ事をお聞きに入れてしまつたね」

と今更案じたけれども、いつてしまつたことは仕方がない、何うしたら宜からうかしらんと思つてゐる中に、彌兵衛が松兵衛の手を引き、長矩侯がその後についてやつて來た。

「殿おはいり遊ばせ」

といふ聲に松兵衛が、

「オイ、又坊、私はお武家の旦那様に面倒を見ていたゞいて、此處まで戻つて來たが、いよくお通りになるぞ」

と大聲あげて告げ知らせる。

「お母さん、遂々お出でになりました」

「オヤさうかい、それはマア飛んだ……」

と只々恐れ入つた母子の二人、オズ／＼して居る、處へツカ／＼と進まれた内匠頭、

「コレ／＼病人、予が參つたとて決して案じるには及ばぬ、サ捨て置け／＼」

「ハイ、恐れ入りましたとござりまする」

「時に其方等母子は古田家の浪人ぢやさうだの」

「ハイ、斯く尾羽打ち枯らし、零落いたしましたは、故主の名前をお尋ねにあづかるも面耻かしき次第……」

「イヤ／＼其の心配もさることぢやが、今は何も案じることはない、古田家の浪人といへば、いづれ其方達にも深い事情のあることぢやらうが、一ツ包まず話して呉れい、又出来ることなれば、随分力も添へて遣はすほどに、語つて見い」

「ハイ、それではお恥もじながら夫の主水が浪人つかまつりましてより今日ま

での一分一付、恐れ入りましたはござりまするが、何うぞお聞き下さりませ、手前の夫主水と申しますものは、古田織部守さまにつかへ、代々老職をつとめまする家柄でござりましたが、こゝに夫の父又左衛門並びに夫の主水と、二代へ奉公をいたしましたる槍持の常平と申すもの、常に何か一人思案に耽り居りまする様子のたゞならぬに、主水も色々といたしまして、辛と實を告げさせますると、世には不幸のものもござりまするもので、此のものゝ出生は藝州沼田の郡廣島の御城主安藝守さまへお手を取つての御指南番、今井田流の達人澤井常右衛門と申すものゝ忤にて、此の常右衛門は武術の上の争ひより、矢張り同藩中の沼澤次郎左衛門と申す武士に欺し打れたとのこと、それゆゑ今は家も絶えて浪人いたし、縁あつて手前方潮田家につかへ居るようになつたやうにござりましたゆゑ、夫主水に置きましては、大きに彼れの不幸を憐れに思ひ、折もあらば力ぞへをいたして敵討させんものと、暇のある毎に彼れに武藝の道を教へました

るところ、思ひの外の上達をいたしましたによつて、人を以て廣島表の沼澤次郎左衛門の様子を探らせましたるに、流石は御名家の藝州侯とて、澤井の家を断絶せしめしからは、沼澤家を其のまゝ召し事ふ時には藩士のものに依估の取沙汰せられんも後ろめたしと、彼のを浪人いたさせられしとのこと、折角常平の武藝上達いたしましたも、當の敵の次郎左衛門が居所わかりませいではその甲斐もなしと、不憫に思ひましたる主水は、常平に路用を與へ身支度いたさせまして、日本六十餘州いづれに敵がひそむとも、君父の讐は共に天を戴かずとやら必ず恨を霽して忠孝二ツの譽れをば後の世までも残せよと、門出の身祝をいたさせ發足に及ばせましてございまする、然るに其の後、丁度足掛二年の間といふもの、梨の礫の音沙汰もござりませぬところから、若しや歸り討にでもなりはせぬかと雨ふり風聞や雪の日は、何處に何うして居るやらと、思はぬ日とてもありませんでござりましたが、其の翌年の夏のこと、主水は病の爲

めに上よりお暇を頂き、攝州有馬表へ浴にまゐりまして、一月許りの療養、幸ひにいたしましたして健康になつたところより、早速歸國をいたす道すがら、草津の驛の松並木までさしかゝりますると、人の噂の彼處此處と、今敵討ちが返り討になつたといふ話、思はず様子を聞きたゞしますると、是れぞ家に養ひ置きましたる槍持常平無残にも敵の刃に最後を遂げて居りまするゆゑ、夫主水にをきまして、主もつ身にはござりますれど、義を見てせざるは勇なしとか、其の場に於て沼澤次郎左衛門ならびに、助太刀いたせし誰れ彼れの四人を切つて捨て、其のまゝ松坂へ戻りまして、もと召し使ひし家來常平の返り討を見るに忍びず、私自儘の復讐を遂げましたるは、主家に對し何とも申分これなく、然るべく御成敗を願ひまするとお届けに及びましたるところ、殿さまよりは却つてお譽めにあづかり、相變らず仕官せよとの有難きお言葉、しかしながら先きは浪人なりとはいへ五人までも斬つて捨てたる上は、定めて其の身中のものが

敵なりとて尋ね来らんも計られず、若し我不運にして討たれしならば、是れなる悴の又市が又々親の敵なりと先方を狙ふことゝもなつた其の時は、主家の迷惑は申すまでもなきことゝ、強つて長のお暇を頂き親子三人、何處ともなく漂らひ出でましてござりまするが、不圖したことより當御領地に参り合せ、女子供の足弱づれとて此の不動堂に一宿いたさせもらひしが不思議の縁となりまして、此の松兵衛どの、お世話を受け、暫らく止まり居りました、然るに一日雪に悩みました普化宗姿のものが三人、一宿を頼みましたるにより、私共も旅の憂き目はいたしつけて心得居りますれば、お氣の毒なことゝ、お世話をいたし種々の話をいたして居りまする中に、其の人は四國伊豫の西條松平左京太夫様の藩中にて條野勘藏、伊豫川門平、金井丹藏と申さるゝ沼澤次郎左衛門の門人衆といふことが相知れ、師の敵と夫に迫りました、夫も初めの中は、いろいろと事の次第を説分けても見ましたが、いつかな聞き入れませぬところより、止

むを得ずして此の平井河原で再度の試合、幸か不幸か又々此の三人を美事に斬つて捨てましたる故、早速此の旨を村役人方へ訴へ出でましたに、西條の松平家よりは、三人にして一人に討たるゝやうな未熟ものは、當藩中にこれあらずとの仰せにて、當家の名前をかたる浮浪人斬り捨てゝかまひなしと有難きお言葉、主水もそこで何のお咎もなく、村方からは御親切にして下さるし、御領主さまからはお譽めのお言葉を頂きまして捨てし浮世に情けの露と、此の村に御恩を受けて居りまする中、不圖したことから其の年の秋枯れかゝる頃ほひ、桐の一葉と共に病死いたし、續いて我身にも此の長病ひ、杖とも柱とも思ひまする松兵衛さまは又アノ通りの眼が御不自由、しかし村方の誰れ彼れが御親切にも私共を御面倒見て下されまするので、やう／＼ながらも今日を過して居りまする次第」

と哀れな長物語り、内匠頭主従を始め、一坐の松兵衛までも、思ひは同じ小夜

衛、友音に鳴くか見えぬ眼にも涙の露が袖ぬらす。

是が長矩侯と又市とを結びつくる縁となつて、茲に初めて潮田又市、又之丞高教と名を改めて、淺野侯が家臣の一人になつたといふのが、講談師調にいふ潮田又之丞高教の傳記である。

しかし彼は始めにもいつた通り、世々赤穂の藩士で、亡君内匠頭に事へ馬廻役二百石を食して居た侍なのである、それで國難の發するに及び、彼は卒先身を挺して義盟の數に入り、終始内藏介と進退を共にして、一致の行動を取り、赤穂退散の日は、其の家族を北條村の人黒金屋某が家に預けて單身京都に出で、一擧の運動に盡瘁したのである。

其の元祿十五年九月、彼は内藏介の命を受けて、原惣右衛門等と一たび江戸に下り、彼の關東急進派たる堀部、奥田等の人々と事を圖議した。そしてもとより多少急進派に心を寄せ居たる彼は、内藏介が持重して容易に起たざるを問かし

がり、遂に關西派の一同と分離して事を擧げんとまで計畫したなど其の如何に忠勇の心厚かつたか分る。

同年八月、彼は再度江戸表に下向して、在府の頭分たりし吉田忠左衛門等と、最も秘密を要する一擧斷行の協議を、仲秋皎月、金龍山畔の舟中に於て終了し、以てさきの七月二十八日に於ける京都圓山會議の方針と合せて大事の方略を確定せしむるに力を盡したのであつた。

斯くて彼は三たび、近松、菅谷、早水、三村の人々と内藏介を護して十一月の五日、江戸に下り、以來原田斧右衛門と變稱して、石町三丁目に居を定め、以て時機の到來を今や遅しと待ち受け居たのである。

既にして同年十二月十四日、愈々時到つて身を固めた雪の晴間、吉良の邸へ討入つて年來の宿望を達し、越えて翌十六年の二月四日、

武士の道とばかりを一筋に

思立ちぬる死出の旅路に
との一首を此の世の名残り、一宮源四郎の介錯にて、細川越中守邸内に相果てた、時に年齒やうやく三十有五、法號を「刃臆空劍信士」といつて、こゝ袖ヶ浦邊の浪の鼓、萬松山の松の琴、ひきも切らざる參詣の碑文古く苦むす巖と共に朽ぬ忠義の功は、今猶人の嘆稱するところである。

赤穂源藏重賢

赤穂源藏重賢は、食祿二百石で役は馬廻り、人となり沈黙寡言、義の心深かつた武士である。主家凶變の起つて以來、彼は奮つて義徒の列に入り、高畑源之右衛門と變稱して、芝濱松町に一家を構へ、同志の士と共に熱心讎家の偵察に従事して居た。

彼の講談や浪花節などによると、「赤穂源藏徳利の別れ」など、いつて、随分有

名な話があるが、それによると彼は播州龍野の城主脇坂淡路守の家臣鹽山伊左衛門の實弟で、赤穂の養子となり、淺野家に事へ居つた、平素大酒を好んで浪々後も數々實家について、酒を強要るので、嫂は深る是を疎んじて居る、復讐當日即ち十二月の十四日、まだ降り止まぬ雪を犯して、源藏が饅頭笠に赤合羽、貧乏徳利を腰に付けて文覺上人が氣のふれたやう、彼方によつたり此方によつたり、八ツたり歩きをしながら、訣別の意を表せんとて兄の家を訪うた。處が平常から伊左衛門の妻から云ひつけられて居る下女のお鍋とでもいふ女、源藏が、

「頼む〜」

といふ聲に出て來て見ると泥酔の源藏だから、

「お出でなさいまし」

と挨拶する傍から、

「ヤアこれはお鍋の君、いつも白粉をつけて立派だな」

と云つた。ソラ悪口が始まつたとは思つたが主人の弟御といふ所から、

「有難うございます」

と頭を下げた。すると

「ウム、下女獅子ッ鼻に白牡丹」

といはれたので、お鍋どんも堪りかねたか、

「貴方はモウ屹度、一ト言ニタ言仰しやつて三口目には悪口、ドウせ私は獅子ッ鼻でございます」

「ウム獅子ッ鼻だから獅子ッ鼻といつたんだ、さう怒るな、そんなに顔を顰めると白粉がバラ／＼落ちる、勿體ないから早くおしろいく」

「まア大變に洒落がお上手になりましたねえ」

「源藏は其方を妻に申受たい、どうだ赤垣の奥にならんか」

「イヤでございますヨ」

「ウム、厭で幸ひ、好かれて堪るものか、人間一分にお化が九分、人一化九、お化そつち行け、私が出るといふやうな……」

「どうせ私はお化でございます、どうせ……」

「さう泣くなよ、さう貴様が泣くと、顔に斯う筋がつく、お前のお國は薩摩かへ」

「私は江戸ッ子でございますよ」

「だつて顔に島が出来た、泣いた顔に島が出来ればかほしまではないか」

「どうせ私は顔島でございますよ、今日は何しにいらつしやいましたのでございます」

「何しにも来ない、お兄イ様は御在宅か」

「旦那様でございますか、旦那様は御殿にお客來でございまして、お取持のお役を仰せ付かつてお出でになりましたから、何うせお下りはお遅うございませ

う、お待ちになりましてもお歸りの程は分りませぬ、誠にお氣の毒様でございます、左様なら……」

「お兄様は御殿へ御主用となれば致し方がない、それではお姉様はお居で遊ばすかな」

「奥様は御病氣でおやすみになつて居らつしやいます」

と、伊左衛門の不在を幸ひ、平生いひつけられて居た通り、嫂は病氣といはせて面會を謝絶した。そこで源藏は仕力がなく、携へて來た徳利の酒を自ら數杯傾けて、其のいくらかを残し留め、自分は或る西國の大名に抱へられ、其の地に赴くため、お別れに參つたが、御不在と聞いて誠に心惜しい、願はくは兄夫婦にも是を酌んで、源藏が心をお察し下されいとの意味を言ひ置いて立去つた、といふことがいはれてある。

しかし事實はさうでなく、一擧の前日、妹婿の某といふものゝ家を探ねたの

であるといふ、折柄其の人も幸ひ家に居合せたので、夫婦は快よく迎へて彼に酒を供した、源藏はよろこんで且つ飲み且つ談じ、傍に居た妹の子を見て、其の頭を撫でながら、

「坊は好い兒ぢや、やがては立派な士にならねば往かぬぞ、な、伯父が坊の生先を祝して佳い物を上げやうの」

とて差添の短刀を遺物に與へ、酔歩蹣跚快然として永訣を告げたといふことである。

快擧の後、彼は細川家へ御預の身となつたが、性無口のことゝて多くはたい黙々に日を送つて居つたが、其の愈々最後も近づいた一日、細川家の家臣某が、

「何なりと仰せ置かれる事がおざらば、身に引き受けてお通じ申さうでおさる」と彼にいつた處、彼は珍らしく口を開いて、

「此の間中は出來物の爲めに些と閉口いたしました、御懇ろのお療治を受け

まして昨日來全快いたし、今日は御上使を以て切腹の御沙汰仰せ聞けられ、本望此の事におざりまする、お言葉に甘へ申して、甚だ恐れ入りまするが、御老中土屋相摸守殿御内に、拙者縁者の本間安兵衛と申す者が居りますれば、今日の事、それへ何卒お傳へ下されたうおざりまする」と
と唯それつきり、中村角太夫の介錯にて、美事生年三十五歳の腹搔ッ切つて相果てた、其の法號を「乃廣忠劍信士」。

堀部 安兵衛武庸

義徒一黨の中、曉勇をもつて名だゝる堀部安兵衛武庸は、越後の國蒲原郡新發田の産、父を中山安太郎といつて、溝口信濃守に事へた身分ある家筋の者であつたが、若氣の至りで素行修まらず、其の父安左衛門に勘當されて新潟に奔つた。茲で、豫て馳染を重ねたる菊屋の小菊といふ藝妓と夫婦になつて、新發田より三

里距つた中田といふ所へ來り、寺子屋を開いて僅かに其の日々を送つて居た。其の中に、二人の間に一人の男の子が生れたから、家計いよく困難に落入つたが中山安太郎、子の愛に引かされて益々衣食の道を勵んだため、細いながらも日々の暮を立てつゝ其の子を安吉と名付け、妻の小菊と共に手の中の玉と育て上げた。丁度安吉が四歳になつた愛いけ盛り、小菊は不圖したことから病の床についた。丁度安吉が四歳になつた愛いけ盛り、小菊は不圖したことから病の床についた。の長病ひ、養生したくも其の日々々の暮にさへ困る身の上だから、薬も祿々與へ兼ねる始末で遂にそれがため哀れにも冥府の人となつて了つた。そこで女房に死なれ幼子一人を抱へた安太郎、如何とも仕方なくますます暮に差支へる折も折或る日のこと、
「あゝ、いやな心持だ」と胸に手を當てゝ居る中に、酷く差込んで來る様子なので、六歳になつた安吉が、

「お父さん、何處か痛いのかえ」

「ウム、安吉か、お父さんは胸が痛いからの、坊や立場へ行つて黒焼の薬を買つて来てお呉れ、其處にお鳥目があるからの、早く行つて来てお呉れ」

と云はれてバタ／＼と戸外へ駆け出した安吉、立場へ来ると四邊は黒山のやうな人集り、見ると一人の槍持が椽臺の處へ大の字なりに踏ん返り返つて居る、槍は軒先の折に立て掛けて、彼方の方には駕籠がある様子は、何か武士の旅のやうなので、ツカ／＼と人込みの中を押し別けて這入りこんだ安吉、

「何うしたの、小父さん、此の人は斯様處へ引つ繰り返つてゐて……」

と傍の人に尋ねながら、不思議さうな顔つきで四邊の様子を眺めて居る。

「此の人かえ、此の人はね、今癩が起つて苦しんでゐるんだが、誰も薬を持つて居ないと見えて、可哀さうにあゝしてゐるのさ」

と云つて居る所へ、茶屋の奥から出て来た立派な武士、

「コレ／＼如何いたしたのであるか」

「ナニお武家さま、此の槍持が今癩を起しましたので……」

「ナニ槍持が、オ、角助かそれは苦しからうに」

と件の武士、自分の槍持と見へて、印籠の中から薬を取出し、供の者に向つて

「サ、此の薬を遣はせ、サゾ苦しいだらうから、早く與へてやれ」

「ヘイ、それは何うも勿體ない」

「イヤ、さうでない、病のために用ゐる薬ぢやによつて、遠慮なく遣はしてやれ」

「ヘエ、有難う存じまする、ヤイ角助、旦那様がお手づから此様宜いお薬を下さるぞサア口を開けろい、コウ角助、口を開けろつたらよ」

「コレ／＼、さう手荒なことをいたしては往かん、其の方が宜く噛碎いて、口移しにしてやれ」

「へエ」

「へエではない、早くいたしてやれ」

「へい、併し何うも此奴は困りやしたな、此の野郎に口移しをするなんて、まるで三國街道で馬の尻を嘗めるやうなものなんだヤイ角助、有難く思へ、乃公のやうな人のお口から直ぐに頂戴して冥助に叶つた野郎だ」

とブツクサ云ひながら、件の薬を口に含んで角助の口中へ入れてやると、角助の咽喉がゴツクリ、ト見てゐる中に、

「ウーン」

と云つて、さしもの癪もおさまつた様子に、見てゐた安吉、小供心にも是を持つて行つて早く父の安太郎に服したらと思つたか、傍にあつたる彼の印籠をば密と懐にして一目散、我が家を指して駈け出す其物音に、思はず振向いた供の者、見ると最前の印籠がない、是は大變とキヨロ／＼眼で索して居ると、析しも見物

の一人が、

「ヤツ、あれを見や、アノ小供の袂の袂の結から、印籠の根附が振ら下つてるぜ」

「ナニ、あの小童の袂からドレ／＼、アツ彼の野郎太え奴だ」
と突然、駈けて行く安吉を追駈けざま、襟首掴んで引摺り戻し、

「此の野郎、途法もねえ餓鬼だ、今つから此様真似をするなんて、手前のやう

な奴が熊坂長範や、石川五右衛門の芽蒨と云ふんだ、太え野郎め」

とボカーリボカーリ拳を固めて擲り付けるので、たかゞ六歳の安吉、

「御免よ、小父さん、御免よつたら、もうしないから勘忍してお呉れよう」

と悲鳴を擧げて泣き呼ぶ聲に、又何か起つたのかと出て來た彼の武士、

「コレ／＼何うしたと云ふのぢや、此様小さな者を打ち叩擲するとは……」

「へエ、是は旦那様ですか、ナニ此の小童めが、旦那様の御印籠を搔拂つたもんですから、今捕めへて懲してやつてるんで、へい」

「ウム、左様か、しかし手荒なことをいたすな、マア〜小供のことだから勘辨して遣せ、コレ小僧、此所へ來な、サア菓子をやる」

「ハイ、有難う、だけれども小父さん、私澤山だから宜いの」

「ナニ、菓子は澤山だ、ちや印籠が欲しいのか」

「ウン、印籠なんか欲かアない」

「欲かないと申しても、其の方を持つて行つたといふではないか」

「ア、持つて行つたけれど、私そんなものは要らないの、たゞね、其の中にあるお薬が欲しいんだよ」

「フーム、薬がなせ欲しい、其の方が飲ふとでも申すのか」

「ウム、私が飲んぢやない、お父さんが癩で苦しがつてるから、私が今茲へお薬を買ひに來たら、あの小父さんが矢張り癩で苦しがつてゐたらう、そして小父さんが與つた此のお薬で、直ぐと癒つちまつたから、私も早くあの薬を

お父さんに飲してやらうと思つて、つい黙つて持つて行つたの、小父さん御免よ、私もう爲ないからね」

「ウム、父が癩を起して難儀をいたし居るによつて、其の手當のため是を持つて参つたと申すか、して其の方の父は何と申す」

「私のお父さんかい、私のお父さんはね、中山……安太郎つての」

「ナ、ナニツ、中山……安太郎、ウム、で何方に住居をいたす」

「此の先の、彼所の松の木があるだらう、あの松の木の所から、もつと此方の方へ行くと直近い所なんだよ」

「百姓か」

「ウム、私のお父さんは百姓なんか、そんなんぢやアないよ、お武士で溝口様の浪人だ」

「ウム、其方の名は何といふ」

「安吉つての」

「何か母は家に居るのかの」

「ウ、ン、私のお母さんはね、私が四歳の時、遠い〜お國へね、行つちやつたんだつてお父さんがさう言つたよ」

「オ、さうか、それは可哀さうに」

と、不圖肩へ繼ぎの當つた衣類を見れば、古いながらに黒羽二重の丸に九枚笹の付いたのは、迷れもなき己が家の定紋に、サテは可愛の我が孫かと、思へば何處となく其の面差の我が子安太郎に似たとは愚爪二つ、圖らずも此所に己が初孫と對面をなしたる中山安左衛門、思はずも恩愛の涙に聲も曇りがち、

「コレ安吉、よく聞けよ、其方が此のやうに惻潑の生れつきで、親を思ふの孝行に感じ、此の印籠ごと薬を遣はすによつて、父の安太郎が許へ持つて行け、痛う、其の古唐士二十四孝の其の中に、陸蹟字を公記といふ人が、槐實といふ

者の許へ參つて橋の實を盗み、持ち歸らんとする時に誤つて是を落したので、槐實是を押へて責め聞きしに、父が好みの果實なるにより、父に與へんとて持ち行くとの趣に、思はず感じた槐實は、返つて多くの橋を陸蹟に與へ遣したとか、拙者敢て槐實を眞似るとにはあらねど、其の心には何の異りがあらうぞ、能く家に歸つたら父に斯く申せ、其の方が今かゝる困苦を見るも、皆己れより出で、己れに歸るの仕業であると、な、宜いか、コレ安吉、忘れるではないぞよ、サア此の三兩の金と薬とを持つて參れ、金は其方の父に與へるのではない其の方にやるのだによつて、落さぬやうに持つて行け、サア、話が濟んだら早う家へ歸れ、さぞ父の安太郎が待ち兼ねて居るであらうから」

と、現在自分の孫ながら、是が其方の祖父ちやぞよと名乗れぬ胸の苦しきを包み隠して物語る安左衛門が心の中こそ、眞に是ぞ焼野の雉子夜の鶴。

「アイ小父さん、有難う」

と、其の金子を押頂き、彼の印籠、片手に、喜び勇んで立ち戻つたる安吉、

「只今、お父さん今歸つたよ」

「オ、安吉か、お薬を買つて来たのか、ドレ〜早く出いな」

言はれて安吉懐中から件の印籠と紙に包んだ金子三兩、取り出して父の枕元に置くをば、ヂット見詰め居つたる中山安太郎、物をも云はず我が子安吉の襟首押へて動かさず、

「お父さん、何するんだよ、私苦しいから可厭だつたら……」

「黙れツ、渴しても盗泉の水を飲まず、何故に其方は斯くまで淺ましき心にはなつたのぢや、苟くも槍一筋の武士が子と生れながら、斯かる人非人の行を働くとは、ム、憎んでも飽きたらぬ奴ぢやツ」

と、怒心頭を發したる安太郎、拳を振つて打たんとする其の手に縋つた中山安吉、

「待つて、待つて、お父さん待つてツたら」

「エ、何を申す、貴様のやうな奴は……」

「待つてツたらお父さん、私は打たれるのは何でもないが、物を盗んだとはお父さん餘り情ない、先刻私が立場へ薬を買ひに行つたら、何處かの小父さんがお父さんのやうな癪を起して苦しんでゐたのを、傍に居たお武士が自分の薬をやつたら其の人が直ぐと癒つたので、私が其の印籠を持つて逃げやうとして捕つたの、そしたら其のお武士が、私の事を一々聞いて、お前のお父さんは自業自得だから今になつて苦しむのは當然だ、此の薬とお金はお前のお父さんにやるんぢやない、私に呉れるんだつて云つたから、貰つて来たの、そしてね、背中の此の紋を見て其の小父さんがポロ〜涙を滴して泣いてゐたの」

「エーッ、扱は父上ぢやつたか、其方がためには祖父様ぢや、ア、有難い忝けない、お詫の段は、これ、父上様此の通りでおざります」

と涙に暮れて手を合せた安太郎、今更に親の恩のひし〜と身に泌みては、越し方の自分が行に悔悟の念は勃然として湧き返り、さらば蔭ながら父の面を拜せんもの、且は自分は例へ名乗りの出来ないまでも、せめて此の安吉だけには祖父と孫との名乗をと、杖を力にとぼ〜と彼の立場を指して行く途中、ハタと出遇つた父の姿に、

「コレ安吉、此のお人が其方の爲めにはお祖父さんちや、サ、お祖父さんと聲を掛けい」

「アイ……お祖父さん……」

聲を聞いて血を吐く思の安左衛門、心を鬼に空嘯いて行き過ぎる、此の有様に安太郎、百度千度己を悔いつ、遂に腹搔つ割いて相果た。此所に於て、瑩々たる孤兒の境遇に落ちたる中山安吉は、寄る邊なき身の振方を、仕方なく〜祖父の中山安左衛門に相計つたのである、安左衛門も、一旦は安太郎に勘當を申付けた

もの、斯く腹切つて申分をなしたからには咎むる筋は既になく、況してや孫の安吉に何の罪あらうと、自宅に引取つて育て上げることになつた。斯くて是に成長なしたる安吉は、其の名を安兵衛と改め、中山の家名相續をなすに及んで、次第に其の人となりを發揮し來つたのである。彼れ天資驍勇果敢にして氣節を尙び夙に名譽の士たらんと志して文武の道を兼修し、殊に劍道は當時海内一の稱ある堀内源太左衛門正春に學んで妙神に入り、打物とつては萬夫不當の慨があつた。既にして年十六才の時、不幸にして又々祖父の安左衛門に逝かれたので、今は頼るに所なき捨小舟、唯、父の安太郎が出奔せる以前、許嫁の約あつたる婦人のお光といふを頼つて義母と冊き、其の日〜を送りつゝあつた。然るに當時、此家に繁々と出入りをする黒田作左衛門なる男があつた、安兵衛の祖父安左衛門、存命中は、さまで親く往來もしなかつたのであるが、其の歿後、彼は暇さへあればお光の許へやつて來て、何くれとなく世話をする、其の中に此の作左衛門、遂には

飛んでもない世話までやらうと掛つて来た。此所に於て流石のお光、今までは親切な人もあればあるものよと、年は老つても世間知らずの嬢様育ち、悲しいかな未だ其所までは氣が附かなかつたが、扱こうと切出されて見るとさあ恐しくて堪らない、どうか作左衛門の来ない手段はあるまいものかと、千々に思を碎いたが宜い考へも出ない。作左衛門は毎日、暇さへあればお光の宅へ入り浸り、頻と我が意に従はせんものをと搖き口説く、遂には夫が高じて或る日のこと、いよ／＼手詰の談判となつたので今は絶體絶命、もう是までと強桑の玉を込めて一發ズドンと肘鐵飽を喰はした。そこで流石の作左衛門も、斯うなつては仕方がないと許り、いやがるお光を捕へて我が意を徹さんとしたから、お光も必死になつて抗ふ中、隙を見出して庭へ逃げ出さんとする、それをば逃してなるものかと、脅しのために一刀引抜いた作左衛門、後追駆けざまお光の袖を捕へて引戻せば、逃げんの一心に力を込めて前へ進まんとしたお光、誤つてドタリ仆れ伏した、動機

を喰つた作左衛門、是亦同じくドタリ倒れる途端、持つたる一刀は無残にも下に伏したるお光の背より大地に掛けて貫いたから堪らない、キヤツと一聲此の世の名残り、あはれにもお光の息は絶えたから、流石の作左衛門も吃驚仰天、是は大變、今にも悴の安兵衛が歸つて来たらば自分の命は危ないと、後をも見ずに逃げ出した。所が此方は座敷内、キヤツといふ聲に驚いて女中ども、我も／＼と走來つて見ると此の有様、

「アレー、大變でございます、人殺しでございます、作左衛門殿が御新造様をお殺しなさいました」

と夢中になつて呼はる、折しも劍術の道場から立歸つて来た中山安兵衛、

「ナニ……ヤツ義母さんが討たれたッ夫は一大事」

と押取刀で駆けつけ見れば、チエー無慘なお光の最期、

「汝れ黒田作左衛門何方へ到りしぞ」

と庭を見れば作左衛門、庭の片隅にある松の木を攀登つて屏を逃げ越えんとする様に、小柄を抜いた安兵衛、鋭ツと狙を定めて投げつくれば、作左衛門が襟元深くズブリー突ツ立つた、アツといつてドタリ下へ落ちたのをば、飛込み來つた安兵衛、

「汝れ母の敵、覺悟しろ」

と美事一刀を肩口へ切り込み、返す刀で止めの一、其の場を去らせず義母の怨を霽らしたものの、今は頼るに家なき浪々の安兵衛遂に江戸表へ出で來つて伯父の菅野六郎左衛門方に身を置くこととなつた。此の菅野六郎左衛門なる人は老功の武邊者として伊豫西條の城主松平左京太夫頼純に事へ、定府として江戸に居た士であつた。當時同藩の士に村上庄左衛門なる人が居つた、是も武術を以て松平侯に事へたのであるが、兎角武藝と云ひ、人望と云ひ、菅野の老人に及ばない、それを庄左衛門が嫉ましく思ふ所から、何とかして六郎左衛門に耻辱を與へ

己の名をして高からしめんと腹黒い男だけに、其の機會を窺つてゐる矢先、丁度元祿七年二月の事、一日兩人が某の宅に落ち合つたを幸ひ、庄左衛門は突然暴言を吐いて六郎左衛門を辱しめんとした。平素事を好まぬ六郎左衛門も、衆人の前で暴言を吐かれるので思はず散々に是を叱責したのであはや椿事にも及ばんとしたが、其の場は仲裁する人のあるまゝ、何事もなく無事相濟んだ、併し濟まぬは庄左衛門の胸の中だ、自分が言ひ出して辱しめんとしたのを、反つて六郎左衛門のため、散々に云ひ捲くられたので愈々憎惡の念が増し、遂に一家兄弟申合せの上、卑怯にも大勢を以て六郎左衛門を討取らんと計事を廻らし、同月二十一日の早朝、高田の馬場に於て果合ひをいたしたき旨、菅野の許へ云ひ送つた。六郎左衛門も是を聞き、扱はと感付いたが武士の意氣地、言はれて見れば後へは引けず、

「さらば詮方なく、此の上は我が一命を棄て、日頃の名譽を全うするばかり

ぢや」

と覺悟の臍を固め、承知の旨を答へ置いた上、支度を調べて若黨の角田作治兵衛といふ者、及び草履取一人を従へて高田の馬場へと出で行つた、尤も其の前に「我等武運拙くして此の儘村上等が刃の錆とも相成らば、後事は宜敷中山安兵衛に頼むと、云ひ傳へて呉れい」

と言ひ棄て、時刻違へず我が家を立ち出でたのであつた。後で菅野の妻女は胸躍らせながら、此の旨安兵衛が許へ急報したので、八丁堀の裏長屋に窺居してゐた安兵衛、是は大變とばかり取る者も取り敢へず家を飛び出すや高田の馬場を指して韋駄天走り、八丁堀から牛込馬場下まで一氣に駆けつけた安兵衛は、ト見ると傍に酒屋のあるまゝ、思はず足を止めて、

「亭主、一杯」

といひざまゝ榎酒グットあほりつけて置いて又々一散走り、やうやくにして現場

へ來つて見れば、今や戦は非常の最中、味方の六郎左衛門を始め、若黨の佐次兵衛及び草履取の三人は、村上庄左衛門、同じく舍弟三郎右衛門、中津川祐見等八人の者に押取込められての大苦戦、六郎右衛門如何に逸ればとて多勢に無勢且は老人のことゝて、既に幾つかの創を負ふて見るも痛ましげな其の風情、踏みしむる足の力も弱々と、斬り込む敵の劍を右に左に避けながら、茲を先途と受けつ流しつ居る様に飛び込み來つた安兵衛武庸、一目見るや否や帯引締むる間もあらせ

ず、
「ウヌツ、卑怯者」

とばかり、大喝一聲喚き叫んで疾風の如くサツと斬り入つた、此の有様に氣を得た菅野の身内、ソレット云ひざまゝ刃先を揃へて敵衆に當れば、先に進んだ村上三郎右衛門、

「小癩な小童邪魔立てするなツ」

と云ひざま、抜きそばめたる大刀を打ち振りく、安兵衛目掛けて討ち懸る、既に怒氣満々たる安兵衛武庸、二討三討、是と太刀合すと見るより早く、ツと手元に飛び入つて白刃一閃、物の美事に斬つて棄てた、と、今しも中津川祐見が六郎左衛門の背後に廻つて卑怯にも不意の一刀浴せんとするに、バツト走り掛つた安兵衛、エイット一聲スパーリ祐見の右手を打ち落した、アツといつて撓む奴をば真つ向かけて唐竹割り、血煙り立つて打ち倒れた、それと見るより敵の一人、又もや安兵衛が後より唯一刀にと打下す太刀の下、ヒラリ體を轉したが早い、早速に薙つた横一文字、安兵衛が太刀の刃えにアツと云つて脆くも地に伏す、續いて今一人、ソレ討たせてなるものかと許り、斬り込み來つた奴をば、

「エイ面倒なツ」

と罵りつゝも振り上げた安兵衛の太刀先にガバと地面にのめすり這つた、其の間に若黨の佐次兵衛、必死になつて渡り合ひつゝあつたが暫くにして是も亦一人

の敵を斬り伏した。敵は斯く宗徒の面々を討ち果たされたので、斬り込む劍も今はいどろもどろ、散々に薙ぎ立てられてチリチリに逃げ失せた、後に残つた村上庄左衛門、此の有様に齒がみをなして憤然刀先鋭く斬り込み來れば、既に手負ひの六郎左衛門、あしらひ兼ねて思はずダチくツとよろめく所を茲ぞとばかりに身を捨鉢の庄左衛門、猶も激しく繰り出す太刀の鋭さに、流石の六郎左衛門アワヤ斯うよと見えたる折も折、飛鳥の如くに駆け來つた安兵衛は、菅野の危急と見てとるや太刀取り直す暇もなく躍り掛つて唯一討、仆れる奴をば今一刀、スパーリ斬りつけて起しも立てず打ち込んだ、此處に於て弱る六郎左衛門を扶けつゝ、止めの一刀を刺させた安兵衛武庸、

「本望ぢや、武庸辱ないぞ」

と喜び叫ぶ菅野をば若黨に抱かせ置いて、斬り棄てたる村上等身内の者の止めを一々刺した上、

「既に事切れた死骸に向ひ、實は無益の仕業であるけれど是が武の作法ゆる已むを得ぬ」

と佐治兵衛に云ひつゝ、其の途を去つた。

斯くして果合は美事に六郎右衛門の勝利に歸したが、受けた創傷が如何にも甚しかつたが爲め、六郎左衛門は自家に引取る途中に於て潔く割腹して了つた。處が、此の果合が意外の評判になつて安兵衛の名がバツト江戸中に廣まつた、それが何時とはなしに、彼の堀部彌兵衛金丸の耳に入つたので、固より同氣相求むるは人の常、如何にしても安兵衛を自分の後嗣にと思ふとモウ矢も楯も堪らない。そこで早速、人を介して安兵衛を音づれ、四方山の話の末、茲ぞと思つたか彌兵衛形を改めて、

「誠に申し難い事でおざるが、拙者貴殿に折入つての御相談がおざる、何とお聞き入れ下さる事は相成るまいか」

「ハハ、拙者に折入つての御相談、何なりとも拙者に於て相適ふ事なれば随分とお聞き申さうでおざる」

「左様でおざるか、それは千萬辱けなうおざる、で、貴殿に御相談とは餘の義でもおざらぬ、實は不躰ながら、拙者の養子に相成つては下さるまいか」

安兵衛も驚いた、如何に武士は直なのが宜いと云つて、是は又、來さうく養子になつて呉れとは、餘り話が早いとは思つたが、扱かう切出されて見ると、返事をせずにも居られない、で安兵衛何と答へるかと思へば、

「不肖の拙者を御懇望下される御芳志の程幾重にも有難うは存すれど、拙者中山姓を名乗つておざる者なれば、今更他家の姓を襲はんことは、チト意に適ひませぬ、よつて折角の御話ではおざるが此の儀御免下されたうおざる」

とキツパリ言ひ切つた、それも尤もなことだ、俗にも、小糠三合もつたら人の婿にはなるなと云ふくらゐだから、如何に貧しく暮さうとて氣概のある安兵衛、

斯う答へるのは普通のことだ。然るに言ひ出した當の彌兵衛、是が又ものゝ解つた男だから、無理は云はない、

「成る程、如何にも御尤もな御意見でおざる、それなれば斯様いたしては如何でおざらう、貴殿如き武士を得て、之に家を譲ること彌兵衛一代の面目におざれば、君侯に申立て、堀部の姓を廢絶し、中山姓其の儘にて拙者が跡目御取立てに相成るやう取計らうでおざる、それならば御不同意はおざるまいと存するが貴殿思召は如何でおざらう」

と押返して頼みこんだ、是が普通の人ならば、自家の姓を廢して了はふと云ふことは、容易ならぬ忍び難い所であるが、彌兵衛の心は又別だ、自分の姓を廢絶してもよい、只立派な跡目相續人を得たい、若し得らるゝものならば家名は其の次きだといふ心だから、安兵衛も感心して了つた。そこで斯くまで云つて呉れるものを眞逆に、それでも可厭だとは斷れない、

「貴殿が左様な思召でおざるならば、如何にも拙者、貴殿の御養子に相成るでおざらう」

と話は意外に早く運んでしまつた。サア斯うなると彌兵衛の喜びは譬へん方もない、所謂手の舞ひ足の踏む所を知らずで、手ん手古舞をする始末、父子の盃は直様其の場に於て取交され、安兵衛は其の儘八丁堀の裏長屋を飛出して堀部が宅に移り住むことゝなつた。

所が茲に面白い話が出来上つた、と云ふのは始め安兵衛が、高田の馬場で果合の際に彌兵衛の妻と娘のお幸とにゆくりなくも出會ひ、其の娘から腰帶を借りて早速の袴となし六郎左衛門の危急を救つた、然るに是を幸ひとして老父の彌兵衛が安兵衛の住居へ押掛け無理やりに養子にして了つた、そこで其の日は彌兵衛が喜び勇んで歸つたので、後に残つた安兵衛、ホット息を吐いて、ア、何うも剛い事になつたと思ひ、夜を明して翌朝、目が醒めると枕許が馬鹿に騒しい、相變

らず隣家の婆さんが起きて来て飯を炊いて呉れるのかと、蒲團の間から頭を擡げて見ると、や、驚いたつて安兵衛、突然ムツクと蒲團の上へ起上つて目ばかりバチクリ〜、それも其の筈だ、文金の高島田、振袖姿の堀部の娘お幸が、若黨仲間を伴れて乗り込んで来て、竈の下を煙さうな顔をしてブ〜やつてゐる、仲間が味噌をする、若黨が水を汲む、長屋の者が總出で見物をしてゐる、安兵衛全然面喰つて了ひ彼方へウロ〜此方へウロ〜、

「イヤ是は何をなさるので、斯様な事を爲されては誠に拙者迷惑をいたすで……」

と云つたが手が付けられない、すると竈の下を燃し付けてゐた娘のお幸が、ピタツと両手を支へて、

「コレはお目醒めでございまするか、お早う存じます」
安兵衛いよ〜驚いて、

「コレは〜、宜うこそお出で下された、だが斯様な事をいたされては、拙者誠に何でおさるからお止め下さるやう、ナニ飯などは隣の婆がいたし呉れますれば、何卒お構ひなく」

「イエお留め下さいまするな、炊ぎの事は女子の役目、百年の苦樂を共にいたす妾のこと故斯様な事をして一向差支へはござりませぬ、何卒お捨置き下されまするやう」

「成程、それは左様でもおさうが、未だ表向きの婚禮をいたしたと云ふではなしする事故、何卒お控へ下されたうおさる」

と幸つとのことで若黨に理由を云つて其の日は歸つて貰ふ、翌る朝になると又其の通り翌々朝も其の通り、と云ふ様な譯なので流石の安兵衛も、

「ア、此の方を堀部父子は斯くまで思つて呉れるのか、武士は己れを知る人の爲めに命を隕す、此の好意を無にしては武士の道にも缺けると云ふもの、さ

らば此の上は堀部父子の志に報いなければ相成るまい」と、遂に安兵衛心を定めて、愈々堀部の養子となつて茲に其の姓を名乗ることになつたといふ。併し是は後々の話で、當時堀部の娘お幸は漸く九才に達した許り、文金の高島田に結つて振袖の衣着るには餘りに小さい、況して安兵衛との婚禮などは思ひもよらぬことである。

夫は兎に角、一度彌兵衛と父子の盃を取交したる安兵衛武庸は、堀部の養子となつてから三ヶ年の間、依然中山安兵衛で押し通して居た、處が一日、彌兵衛老人が主君内匠頭の御前へ出で、

「殿には既に御聞召もおはしませうが、彼の中山安兵衛なる者は高田の馬場に於て、多くの武士を相手にいたし、伯父菅野六郎左衛門の仇を討取つたる勇者におざりますが、拙者先年悴を失ひましてより相續人と申す者おざりませぬ故、右の安兵衛を養子に仕り、家督いたさせたく存じましたる所、彼れ安兵衛

は他家の姓を冒すことを承諾仕りませぬ、併しながら、彼が如き勇者を入れて、一朝事ある時君國の御用に相立てんこと、拙者一期の願ひにおざりますれば、何卒中山姓のまゝにて拙者跡目仰付けられまするやう、切に御願ひ申し上げます」

と懇願した。君侯も是を道理のことと思されたか、

「苦しうないによつて、願ひの趣聞届け遣す」

と許されたので、早速家に戻つて右の旨を安兵衛に物語つた。安兵衛も是を聞いて、斯くまで自分を思ひ呉るか、さらば何とて中山姓を固執するの要やあると、茲に中山の姓を棄て、堀部を名乗ることとなり、彌兵衛老人の好意に報いた斯うなつて見ると、彌兵衛老人の喜びは亦一層、殆ど我を忘るゝまでに打ち喜んで、此の旨斯くと君侯に上申した。内匠頭も、

「左様であるか」

と云つて、是亦感稱斜めならず、昨日の中山安兵衛は今日の堀部安兵衛となつて、遂に其の家を相續し、高二百石を食んで馬廻に列せられたのである。斯かる内に十四年の三月十四日、主家の大家は突として起つた、君侯は切腹する、城地は取上られる、一番は分離する、赤穂の藩士は、實に四離滅裂の有様となつた、茲に於て堀部安兵衛武庸は、養父彌兵衛金丸と共に大石の幕下に馳せ参じて、復讐の計に與ること二年此の間臥薪嘗膽の苦を凌いで十五年十二月の十四日、遂に其の宿望を果たすを得たのである、實に此の間に於ける彼安兵衛の苦心は非常なものであつたのである。彼は復讐の後、人に斯く語つたことがある。

「同志の中にも、暢氣な輩は、其の内職に醫者をしたり、師匠をしたり、點者となつたり、宗匠を真似たり、聊かながらも収入の途もある、が、我々の如きは實に復讐専門なのであるから、毎日／＼食究める一方である、それも必定本望を遂げ、目的を達し得られると極つてゐるのなら、襤褸を着やうが、食ふも

のを食はずに居やうが更々厭ふ所はないけれど、成敗利鈍は悲しいかな豫め睹ることを得ぬ、よつて願はくは餘りに尾羽打枯さぬ間に、此の一擧を斷行したいとは、當時日々夜々、胸裡を往來して離れ得なかつた心遣ひである」とは、以つて察するに足りるであらう。

始め、安兵衛は主家の凶變に會するや、藤井安井の兩家老以下一藩の在府の輩が、概ね俱に事を議るに足らざるを憤慨し、凶變の翌月奥田孫太夫、高田群兵衛等を誘つて赤穂へ下り、大石以下の諸士を歴訪して盛に籠城を主張したのであつた。然るに時既に遅くして、城中の會議は一決、大勢の赴く所又如何とも手を施し難いので、徒らに齒を噛み腕を扼するのみであつた。所が、ある動機からして内藏助の本懐を領取したので、さらばと其の儘江戸へ引返し、日夜、警家の様子を窺ひ、其の緊要なる動靜を探索しては是を一々山科なる大石の隠宅へと報告した、そののみならず一方斯く警敵の進退を窺ふと同時に、一方に於ては隙のあり

次第、一日も早く吉良家へ討入つて、上野介の白髪首を手にと心と心を碎いた、しかし時機は容易に來らぬ。此所に於て性短急の安兵衛、ソロ／＼焦り出して來た、そこで同年の冬十一月、名を亡主の追弔に借りて江戸表へと下向した内藏介は、安兵衛が率ゐる急進派の連中共が、復讐の一議を焦つた結果、若しも敵方にソレと察せられるやうなことあつては一黨の一大事と、是等を陰ながら鎮撫せんとしてやつて來た。然るに此方は安兵衛、内藏介等が關東へ下つて來たのを幸ひ、一意専心に猛斷速決を迫つたので、内藏介は已むを得ず、今十五年三月即ち亡君の一周忌を相待つて事を擧げんと約し、僅かに彼等に納得せしめて山科へ立ち戻つた。しかし三月になつても四月になつても内藏介の足は山科を離れぬ此所に於てか安兵衛の癩癩玉は勃發せんとした、當時彼の意氣込といふものは實に盛んで、

近頃江戸侍了簡多く、畢竟腰のたゞざる故と申すべきか、言語に絶し候、十人

存じ切つたる者共これあり候は、中々再往かくの如く御相談に及び申すまじきものをと、御下墨口惜しく存じ候、と云ふやうな文字を連ぬる程であつた。十人……然り、たつた十人の小勢を以て、警固厳しき吉良家へ突入せんとする實に其の勇氣たるや想見するに餘りあるではないか。此の頃、彼は本所林町五丁目に家を借り受け自ら長江長左衛門と偽名して住居し居つた、で其の間と云ふものは何もなすことなく、日毎々日ブラ／＼して唯警家の動靜を窺つては復讐の一事に腐心するのみであつた、だからして貯への金子も次第に残り少なくなつてくる、従つて勝手もとも不如意となつて随分其の日／＼のことまでも心配せねばならぬやうになつた。斯ういふ風であつたから、安兵衛が復讐の大事を急いだのである、と言ふのは如何に浪人したかと云つて、餘りに尾羽打枯らした様では、聊か舊主の面目にも關するし且は何時復讐をするやら時節も分らないでは、其の時

まで暮を立て、往けるやら、それさへ覺束ない次第なのだから、焦つて居たのもあながち彼が氣短の所爲ばかりでもないのである。併し幸ひにして、十五年十二月の十四日、愈々大事を決行することとなつたので安兵衛等の喜びは譬へん方もない、只管其の期の至るを待ち焦れて、指折り數へ居つたのであつた、であるからして當夜に於ける彼等の働きと云ふものは、實に鬼神も手を引いて驚嘆するばかり、當るを幸ひ片つ端から薙ぎ立て、太刀の目釘の續く限り切り捲つたのであつた。斯くて目出度くも上野介の首級を擧げ終るや、彼は一黨の諸士と共に芝高輪なる泉岳寺に引き揚げ、それより一旦仙石伯耆守屋敷へ立ち寄つて、大石主税以下九人の人々と共に松平隠岐守宅へ御預になつた、而して翌年の二月四日荒川十太夫の介錯の下に美事切腹してのけた、時に年やうやく三十四「刃雲輝劍信士」なる彼の法號は、彼が高田の馬場に於ける奮闘と共に、長く人の口に傳り残るであらう。

不破 數右衛門正種

四十有餘の義人、皆悉とく武藝に發して居ぬ者はないが、衆に拱んで、劍道の蘊奥を究めて居たのは誰であるかと問ふたら、先づ渠不破正種と答える、就中て据物を斬る事に於て勝れて居たやうである。

併し、衆に超えた其の劍道が、却つて渠を禍はひする原因になり、且亦渠の義人中に於て、すぐれて名聲を掲げた原因ともなつたのである、誠に面白い話ではないか。

世に言ふ、藝が身を助くるほどの不仕合せ……、例ば茲に遊藝の好きな大家の若旦那がある、金の有るに任せて、曰く花會、曰く義理、曰く交際、曰く何、曰く何といふが如く、數萬の財産を、己れの好む、而して己れの優れて上手な遊藝の爲めに悉とく蕩盡したと假定する、さうして忽ち變る太夫或は師匠となつて、

遂に生涯を無事に終つたといふ、之と殆んど相似て居りはせぬか。

己れの其の藝にすぐれて居るが爲めに、數萬の財産を抛ち、亦、其の藝の爲めに身を立て、居る、今言ふ數右衛門の劍道も夫であるのだ、一度は其の爲に禍し、亦一度は其が爲めに名を揚げたのである。

それは、どういふ機會に於て爲されたのであるかといふと、茲に面白い話がある、即ち渠の傳記に付て述べやう。

元來不破數右衛門正種は、同藩の士、凶變の起つた際、鎧櫃を荷ひ來つて、俱に籠城せんことを請ふた、岡野治太夫の子であつて、不破家の養子となつたのである、之は數右衛門が後の親類覺書に依つても明らかなもので、「實祖父は岡野文右衛門、八年以前死去、實父は浪人して佐倉新助と言ひ、播州龜山に居る」と書いてある、して見れば數右衛門は岡野治太夫の子であつて、岡野治太夫は、仔細あつて淺野家を浪々して、其の當時佐倉新助と名乗つて播州の龜山に居つた事は

明白である。

數右衛門の養家、不破家は淺野家に於ては相當の門閥であつて、祿は三百を食み、職は馬廻兼濱邊奉行を勤めた、淺野家に取つての濱奉行は、却々輕からざるものであつて、數右衛門も養嗣子として、其の職を襲ふて、能く職責を完たふして居た。

が凡そ人として癖のないものはない、渠數右衛門は天稟の豪放不羈、勇武にして小節に拘はらぬ人であつたから、水清くして魚住ますの譬に洩れず、決して權威に阿り諂はなかつたが爲めに家老の大野九郎兵衛とは、恰かも水と油の如き觀があつた。

後年、渠數右衛門は、大野の毒舌讒構に掛つて、淺野家を放逐されるやうな事になつたのも、即ち夫であるのだ。

事は凶變に先立つ事四五年、其の理由とするのは、

第一は、死屍を發き試斬をした事

第二は、勤務を疎略にし同僚と折合よろしからざる事

第三は、勝手向不如意といひながら囃子をした事

此の三ツが重なる理由であつた、第二第三は兎に角、第一に於ける、死屍を發いて試斬にしたといふのは、實に不穩當な話であつて、確かに己れも後悔懺愧したに違ひない。

雖然、渠の如き、豪宕なる英雄としては誠にやりたい事である、詰り六尺有餘の快男子たる渠が、衆に勝れた劍道の達者であるだけ、夫だけに猶更制へ切れないかつたのだらう。假りに其の當時の光景を想像したならば、先づ斯うではなかつたらしか、

或夜の事である。

酒は最早數献を傾むけ終つて、數右衛門は虹の如き息を發と吐いた、渾身の血

は酒に燃えて、神経は愈よ興奮して來た。

時は元祿である、弓は袋に、刀は鞘に、世は太平に狎れて正に武士道は地に隕んとしつゝある。

此の時に當つて一世の英雄數右衛門の憤慨は頗ぶる盛んなものであつて、

「嗚呼止みなんかな武道の衰頹の甚はだしき」

と言ふて、愛翫の銘刀を燈下に抜いて打振る事が例であつたから、同じく其の夜も秘藏の一刀を引抜いて、燈下に翳して莞爾した。

人は或動機に依つて、その必要の或者を要求するものである、例ば金を見て其の金を要求し、食を見て其の食を要求するが如きものであると、同時に罪を構成する事もある、即ち金を求めて強盜を働らき、食を求めて窃盜を働らくが如く渠數右衛門は、泰平の墮弱武士を慷慨の餘り、引抜いた己れの愛刀を見て、何者か求めて止まぬのである。併し、渠とても酒といふ興奮劑がなかつたら斯くの如

き事は爲さなかつたのであらうが、平素の豪放不羈の氣質は、數献の酒に依つて遺憾なく發揮された、世の武士道の衰頽は、渠をして斯の如き活劇を餘儀なくさせたのである。

夫は何である、即ち放逐の第一條に立てられた、死屍を發いて試斬をした一事であるのだ。

數右衛門は我を忘れて、愛刀を提さげると、小屋を出た、歩むともなく來たのは、城下の某寺の墓地である。

朽た板の堀の橋を危なげに渡ると、熊笹は簇々として、歩む度に音を立てる、時は秋であつたから、月は廣い墓地を隈なく照して凄凉たるものであつた。

數右衛門の眼には、先づ誰とも知れぬ、南の一隅にある、新らしき一ツの墳である、墳はまだ土塊さへ乾いて居ぬ、墳の上には怪しげな膳に、食器の二ツ三ツが轉がつて居る。

數右衛門は夢の如くに近寄りて、墳を發掘したのであつた、此場合無論渠は他を顧みるの餘裕はなかつた。只夢の如くに働作たのである。

懸て引出されたのは一個の死體である、數右衛門は未だ此の死體を見るに及んでも、罪惡であるといふ事には思ひ及ばぬのであるらしい、只無我の中に腰の愛刀は引抜かれた。

「エイッ」

聲は背後の森に響いて凄かつた。氷の如き銘刀は閃乎と光つた、と思ふ間もあらせず、前の死骸は見事兩斷された。

數右衛門は莞爾と笑む。

斯くの如き光景が、此の墓地の其所此所に繰返されること、二度、三度、四度死體は月に照されて、二と見得られぬほどであつた。

併し、夜風の身に泌むと共に、數右衛門は恰かも喪神した如くになつて、身震

ひした、而して鼠狐々々に邸へ歸つたのである。

其の翌日の騒ぎといふたら非常なものであつた、墓地を抜けて、畑へ出やうとした百姓が発見して腰を抜かしたといふ、豪い噂さだ。

「やア魂消たもんだ、那りやア何でも天狗様の爲た事に違えねえ」

「然うさねえ、まあ、逆も人間にやアあんな事は能ねえで、確か天狗の仕事だろさ」

「だけんど天狗様が何故あんな事を爲たのだから、別に悪い事をいつたでもなからうに、夫とも誰か天狗様を悪く言つたかな村の者が……」

「なんの、誰もそんな事言ふものはねえさ、けんどハア、お寺様の裏山にやア太え杉があるかよ、那所にでも居るのかも知れねえ」

村の者は取敢ず寺の本堂に集まつて、評議やら善後策やらを講じた。此の時に和尚は先づ起つて、己れが今朝知らせのあつた時から、現場の模様を

見た事、亦、天狗の所爲でない事を説いて、終に一個の證據物を示して斯ういつた、

「村の衆、之は確かに家中の若侍が爲たらしい、夫は死骸が皆な刀で斬つたのであると、現狀に落居た此の印籠とが、即ち證據でおさる、此の上は猶

豫はなり申さぬ、假令死體であらうとも、死人には死人に對するの禮がある、墳を發掘て死人を試斬にするとは言語に絶えて居るぢや、之を放任して置たら

亦家中の侍が宜い氣になつて爲らぬとも限らぬで、因つて、之は愚僧が御家老様の

大野九郎兵衛様へ願ひ出る、而して詮議をして貰はにやならぬ」

村民も和尚の言ふ所に賛成した、忽ち名主五人組等の判が据えられて、一通の訴狀は出來たのである、和尚は自ら大野の邸に伺候して、委曲を具陳に及んで、

其の吟味並びに刑罰を求めたのである。於是大野九郎兵衛は彼の印籠に依つて詮議した、遂に不破數右衛門なる事を

確かめたのであつた。

不破と大野は、前に述べた如く、家中に於ても頗ぶる氷炭相容れなかつた仲であつたから、大野に取つては、實に此上もなく讒構の好材料を捉えたのである、が夫に引代て、不破に取つては頗ぶる不利なので、倘し之が大石内藏介の手に依つて發見されたのなら、如何に賞罰は枉げられぬといふても、何とか他に探るべき手段があつたらうと思ふ、併しながら、如何に酒の上とは謂へ、如何に對手が悪かつたとは謂へ、死人を發掘して試斬にしたといふ事の罪である事は許されぬ遁れられぬ所であるのだ、然ればこそ數右衛門が大野の讒構三ヶ條で、閉門百日を申し渡されて、唯々として謹慎をして居つたのは、即ち此の一條がある爲めだ、之があるが爲めに彼は百日の謹慎を、自から進んで爲したのである、して見れば確かに渠數右衛門は、死人を斬つたといふの一事は、心中大いに後悔懺愧して居たのであらう。

所が百日の閉門が了つて後、藩廳に出た、其の時に數右衛門が、大野から申渡された例の三ヶ條に付て斯ういつて居る。

「我等、罪に問はれ申した三ヶ條の中、成程死屍を發いて試斬した事は、一言の辯疏もおざらぬ、さりながら第二第三の箇條は、那や眞實我等、覺えのおざらぬ事、如何なる證據のおざつて斯くは仰さるゝか、我等身に覺えぬ濡衣を被るは、如何にも残念でおざる、此の二箇條は取消のしてお貰ひ申したいで、夫がならずば、我等存する旨のおざる、假合上に立つ仁なりとて、枉つた節のあらば直さねば相成るまい、我等極力二箇條は服せられぬで」

と性來の潔白な氣質は、逆も此の冤罪には服す事が能なかつた、さればこそ重臣たる大野に斯くの如く、忌憚なき辯解を試みた。

佞人大野は又夫を含むだ、何の渠數右衛門如奴、何をいふたとて、殿の愛臣たる我等に及ばふ、今に見よ、亦機を見て渠を永の暇にして呉れう、と思ふて居た。

其の後三月ほど経た、或日突然殿内匠頭から永の暇といふ辭令が下つた、其の言ふ所は、數右衛門が罪なき家僕を手討にしたといふ事であつた、併し數右衛門は更に身に覺えのない事であつたので抗議を申立てた、雖然、素より事が、殿の衷心から出たのではない、彼の大野の讒構からであつたので、其の數右衛門の抗議は、悉く中間に在る大野の手に握り潰されて了ふて、内匠頭の耳には入らなかつたので、遂に此の抗議に依つて永の暇を遙かれる事は能得なかつた。

乃で心ならずも渠數右衛門は淺野家を浪人して僅かな知己を求めて江戸へ出た併しながら決して渠は殿を怨むといふ事は爲なかつた、如何なる境遇に立至つても、如何なる浪々中辛勞に遭遇しても、内匠頭は毫も恨みとは思はなかつたのである。

夫は何故であるかと言ふと、數右衛門自身は、己れが永の暇になつて、淺野家を放逐されたのは、決して、内匠頭様の御心から出たのではなく、己れに怨み

を含む大野が、中間に在て斯くの如く計つたのであるといふ事を、百も承知であるからであつて、さればこそ數右衛門は、家老の九郎兵衛をこそ怨め、決して殿は怨まなかつたのである、否、怨まぬのみか、渠は浪々申も絶えず殿内匠頭の武運長久を祈つて已まなかつた、而して覺えのない罪は、何日か一度は必らず晴れる、冤の濡衣は、或時期に到れば必らず乾されるものであると信じて、節を變せず、忠臣二君に仕へずの本文に則つて、時の來るを待つて居たのである。

爲るに其後僅か三年にして淺野家の凶變となつた、内匠頭は切腹、家は斷絶——と聞いた時の數右衛門の驚愕は一通りではなかつた、雖然、己れは浪人中の事、如何にすべきか其の身の處置に苦しんだ、苦しんだけれども、奈何とも仕様がなかつた、只心ならずも日を送つて居たのである。

或日の事、同じ淺野の家中に於て、最も親しかつた磯貝十郎左衛門に會ふた。

「やア之は」

「おゝ之は」

「不破氏か」

「磯貝氏か」

「お珍らしい所で」

と兩人互ひに久瀾を叙して、無事なるを喜び合ふた、其時に話しはお家の凶變に及んで磯貝が、

「いや不破氏、既う這回の事件は何とも言ひやうもおざらぬ、不意の出来事ではあるし、御家中は宛然鼎の湧くやう」

「左様でおざらう、我等も浪々中に聞きまいて、如何いたさうやら、採るべき手段が判らず、一度は播州へ駆付けて、同志と俱に城を枕に討死仕つらうかと存じたれど、能く聞けば最早同所は引拂はれさうにおざつて、據どころなく、只心のみ思ふて暮しましたぢや」

「おゝ、左様でおざるか、浪々せられまいても其のお心掛け、正久感じ入つておざる、亦殿も(内匠頭)御身を暇せられて後、我等御前にある時、思ひ出でられたやうに、御身の事を繰返され、渠は實に惜しき武士ぢや、或者の讒構と知らず永の暇取らせたは、予が誤りであつた、眞實渠には根もない事ぢやつたと仰せ出られては惜まれておざる、未來に召戻さんのお心があつたは、我等能く知つてはおざる」

と聞いて不破は涙をハラ／＼と流して、

「誠、左様でおざつたか、噫、我等夫にて心は解けておざる、浪々中も決して殿は怨まいでおざつたが、夫は、何時か眞實の傳えられんとの意からでおざつた、去るにても其の君を計らぬ凶變に失なふたは、我等に取りては、如何にするも取返し得ぬ憾みでおざる、只此上は、我等の意を知られて、さまで仰せられた殿の爲めに竭さうより他にはおざらぬ、磯貝氏、我等の心は斯くの如

くでおおる」

「お、能う言はれたぢや、お暇許りぬ中に此凶變に遇ふて、嘸お憾にな思さう」

「如何にも」

暫時兩人は語つて、而して同道したのは高輪の泉岳寺であつた、此時には亡殿の遺骸が葬むつてある。

纏て足を停めたのは「冷光院殿」とある石墓の前であつた。

折柄空は、未だ春秋に富める長矩の、花咲く夕、入相の鐘と共に散失た當時を追懐させるが如く、蕭々と雨が降出して來た。

數右衛門は濡るも忘れて墓前に跪づいた、而して恭々しく兩の手を仕いて、

「殿、久しふおざつた、我等數右衛門におざりまする」

と言ひもあへず涙を流して、茲に己の意中を諄々と披歴した。如何にも其の態

が誠で、且つ憐れに聞えたので磁貝は竊に同志の者の計畫を物語つた。

聞いて數右衛門は是非に其の黨中に入りたい旨を言ふた、時に十郎左衛門が、

「さればでおざる、御身が至情に動かされて、斯は物語りたるが、併し黨中に入るゝ事は、我等何とも計らひかねる、然までに思召るゝならば、山科に居らるゝ大石殿に願ふてお見やれ、其上にて右も左も」

「如何にも、然らば山科に行て、太夫に願ふて見るでおざりませう」

「夫こそ……」

と兩人は猶も語り續けて、話しは却々に盡きなかつたが、互ひに再會を約して別れた。

數右衛門は直ぐに準備を整えんと、江戸を立つた、無論行く先は京の山科である。大石の寓居を或夜竊かに訪ふた、而して熱烈なる己の意中を打明け、且つ磁貝の言葉も添えて黨中に加えられんことを願ふた。

内藏之介が此の時に言ふたには、

「其許の意中は内藏熟う分りまいた、誠に亡なられた殿も草葉の蔭で喜ばれていおざらう、さりながら御身は現在浪人中で、浅野の家に籍のおざらぬ仁ぢや、其の浪人の其許を黨中に加えたりや、人は何と言ふ、浅野の家中には人が無ふて、浪人までも驅集めた、と斯う言はりやう、其れは我等の本意でない、因つてお志は嬉しいが、残念ながら黨中へ加へる事は能申さぬ」

きつぱりと言ひ断つた。數右衛門は

「さらば、如何に願うても……」

「おゝ、已むを得ぬ」

「最早之まで、數右衛門望みなき世に生存るも無益、太夫、さらば」

と言ひ放つて數右衛門は双肌を押脱いで、短刀を取直すと、咄嗟、左の脇腹に刺さうとした。

内藏介は、

「待てッ」

と止めて、短刀を挽ぎ取らうとした。

「いや太夫、死なして」

と猶も數右衛門は身を悶える、

「まあ待て數右衛門、取るべき手段のあるのぢや」

「えゝ、採るべき手段とは」

「さあ刀を放せ、後に篤と談する」

「誠」

「おゝ」

數右衛門は肌を入れて兩手を仕いた。内藏介は容儀を正して、

「其許、夫までに思ひ込んでおざるか、噫内藏、實に頼み存する、此上は斯く

計らうて」

と聲を潜めて數右衛門に何事かを語つた。數右衛門は頷いて莞爾、

「太夫、何分ともに」

内藏介は無言で頷いた。

斯うして數右衛門は江戸に下つた、併しながら未だ義盟の中に加はる事は許されなかつたのである。

月日は矢と流れた、十一月十三日となつて數右衛門の許へ一通の書狀が到來した。

文意は斯うである。

明十四日、禮服用にて泉岳寺へ御出向あれ、豫ての儀、亡君の尊靈に願ひ奉つるべく。

とある。豫ての儀とは、即ち先の内藏介と數右衛門の間に成立つて居た話しであ

つて、其れは内藏介が數右衛門の赤誠に絆されて、泉岳寺の亡君の尊靈の前にて歸參を許されるやう計らひ呉れ、其の後に於て義盟に加入を許すといふのであつた。

されば愈よ數右衛門の望みは達せられるのだ、其の喜びは一方ではない、一夜を千秋の思ひに明して、十四日の未明から禮服用に及んで數右衛門は泉岳寺に内藏介の來るのを待つた。稍久しふして大石は、亡君内匠頭の命日を弔ふべく來つたのであつた。

見るより數右衛門は、威儀を正して、

「御書面により斯くこそ參上仕つておざる、御赦免の儀偏に願ひ入る」と述べた。

雖て内藏介に躡いて俱に與に長矩の墓前へ進んだ、數右衛門鞠躬如として恰かも君在ます時の如くであつた。

内蔵介少しく前に進み出で、徐ろに、

「舊臣不破數右衛門事、君の御不興を蒙りつて、一度御國許を退去仕つりましたれど、朝暮先非を悔ひて、只管恩免を願ひまする、其の眞實、一點の偽はりもおざりませねば亡君の尊靈、願はくは其罪を許させ玉へ、不肖内蔵より願ひ上げまする」

言ひ終つて幾度か拜伏し、懸て塵打拂つて御墓の側に跣まり、凜々として

「數右衛門ッ」

と呼んだ。

數右衛門は、

「ハッ」と平伏をする。

内蔵介は再び元に還つて、

「數右衛門、只今亡君より御赦免に相成つた、役儀其他は元の通りと心得よ、

いざ此上は義盟の中に」

「忝じけなふおざる」

茲に數右衛門は望み通り義盟の黨中の一人となる事を得たのであつた。

斯うして渠數右衛門は翌年三月武林と共に上京して大阪の老松町の原惣右衛門の宅を訪ふて暫時滯留した。

其内に七月廿八日の圓山會議となり、彌よ討入りが決定して、再び江戸へ還つた、其の時は既う不破數右衛門とは呼なかつた、松井仁太夫と假名して新麴町六丁目の吉田忠左衛門方に在つて、討入りに就ての便宜を計つて同志と相往來して居た。

月日は經つて彌よ十二月十四日の討人となつた、數右衛門の當夜の働らきは頗ぶる賞美すべきものがあつた、其の當時の光景は實に武士道の模範とすべきものであつたとの事である。

松平隠岐守の邸に預けられて、後潔ぎよく義黨一同と俱に自刃した、不破の介錯人は荒川十太夫といふ人であつた、號は「乃觀祖劔信士」と云ひ、行年三十四歳である。

此の不破の傳記を書くに就て、此の他に最も面白い話がある、夫は「赤穂義士参考内侍所」には斯う書いてあるからである。

不破數右衛門正種は知行百石を賜はつて奉行役を勤め、古今無双の勇士である。身の丈は六尺に餘り、若年の頃から劔術に心を寄せ、天晴な達人であつて、好んで、科人を試し斬し、後には城下へ來る無宿者などを招いて、正種が諭して言ふに、

「汝とても長き命はあるまい、露に濡て、餓死をせんより、我に命を呉れよ、汝が好む食事は魚なり鳥なり、何でも飽まで食はしてやる」

と澤山に與へて後手討にして、遂に据物斬の名人となつて、只管之を好んだの

で、後には無宿者が城下へ來なくなつて了つた。

或時正種が、酒の酔に乗じて、死人の埋めてあつたのを掘出して、之を試斬にした、所が此の施主が之を知つて大いに怒り、

「假令御城内の歴々にもせよ、稀代の悪事を働らく者である」

と一類を集めて評議をし、菩提寺へ訴へた、住僧も之を聞いて大きに怒り、

「何者にせよ、珍らしき悪事である、此上は寺を開くか、又は其の者を申し請けるか、存分にしなければならぬ」といふて、此の事を訴へ出た。

正種は、此の事を聞いて、大いに驚ろき、且後悔したけれども返らぬ事であつて、最早致方がない、己れの犯した罪で己れが苦しむのは、自業自得である、此の上は如何やうとも罪に落と覺悟をして居た。

所が折柄内匠頭在國であつて、此の願書を見て仰せられたのは、
「數右衛門以ての外、悪事である、願ひの趣き尤ともである、長矩、自ら手討

にして絶家申付けるに依つて、夫にて腹を癒よ」とあつたから、願人並びに住僧も、

「有難い仕合せでございます」といつて歸つた。

スルと此の事を聞いて、浅野の家中で、數右衛門と別戀にした者が、密かに正種に知らして、

「云々でおざる、早々立退かれるやう」と忠告をした。

之を聞いて正種は、

「誠、お志ざしは忝じけなくおざるが、自ら悪事を作り、其の罪が定まる、夫を通れんとするは、大丈夫の所爲でない」といふて用ひなかつた。

聽て案の如く長矩の召出である。

「正種、來りましておざる」と申入れた時、内匠頭は、

「さらば、庭へ廻せ」との仰せ、切戸口からお庭へ出て平伏をする。

此の時に長矩刀を提て椽先にお立出でになり數右衛門を見て、

「數右衛門、其方は不届至極な奴である、依て今日内匠頭自から手討にいたす左様心得よ」

數右衛門平伏に及んで、

「は、ッ、如何なる重き御處刑仰せ付けられるかと、存せしに、殿御手討下されるとは、數右衛門身に取り、如何ばかりか有難き仕合せに存じます」とお受けに及んだ。

徐々と庭に降り立つた長矩は、刀を抜いて數右衛門の後に廻り、

「ヤッ」といふ聲と共に振下した一刀、正種の首は前に落たかと思ひきや、さ
はなくして、數右衛門の元結際からブツリと髪を切落されて、
「これよ、早々此の死骸を取捨てい、併し武士の屍、無腰にて捨てん事も如何
あらんか」

と大小を取添へ、金子一包を投げ出し、

「這は葬式金であるぞ」

と仰せられた。

正種は夢か現か、定めかねて、只有難さの餘り、涙に暮れて居たのである。

此の時に長矩が、

「さても能く斬れた、數右衛門勤方には無双の者であつたるが、己が罪、己れ
を責め、内匠頭にも永の馴染、心を痛めし」
と袖に顔を押宛て、居られた。

此の時に兼て仰せ含めて置かれたお側衆三四人が庭に下りて来て、

「數右衛門殿、御情を以て助命仰せ付けられる、何所へなりとも立退かれよ、

又二君に仕へて身を盛んにせよとの御事、人が見れば悪かるべし、早うく」

と引立てられて正種男泣に泣入つて、此の御恩、何を以て報じ奉つらんと、暫

時悲しんで居たが、聽て心を取直し、遂に御城を退き、總髪となり、浪人を立て

朝夕赤穂の城と、江戸御屋敷を三拜九拜し、十四年の年月を送つた、とある。

之等は前の説と殆んど相似たものであるが、併し十四年の年月とあるのは全然

虚説であつて、何を見ても正種が凶變の四五年前までお家に在た事は明らかであ

る、夫から亦斯ういふて居る。

攝州菟原郡東洞村といふは、御影から二町の西の方、兵庫の手前西の宮から二
里ある、此の邊は石を産出する爲め、頗ぶる繁昌の地である、其村に、東本願寺
の末寺で、稱名寺といふ寺があつた。

住持の母の姪といふのが即ち不破數右衛門であつて、先頃中不調法があつて御暇になり、赤穂を立退いて浪々の身、大阪へ行つて夫婦諸共長町七丁目の宿屋に泊つた、けれども、別に之ぞといふ覺えた業がない爲めに、五日七日と段々日を暮らして居る中に、女房は妊娠の爲め、心持が悪いといふて寢た、數右衛門は藥を與へ、種々介抱をして居る中に、早くも臨月となつて、子は安々と生れたけれども妻は産後の肥立が悪く、其内にブラ／＼として一年餘も經つたのであつたから國許からの貯えも茲に全たく費果し、衣類其の他を賣代にしたが、此の妻は元同家中の娘であつたから、武士の嗜みで、賣喰の中にも母の讓の薙刀だけは放さなかつた。

數右衛門は、己れに似合しい奉公口があつたけれど、忠臣二君に仕へすと、仕官の望は更になくて、毎日鳥をさし、或いは魚を獲つて之を金に代えて居た、併しながら之とても仕馴た業といふではなし、畔の落穂を拾ふに齊く、如何はせん

と考がへたが、他に思ひ付きもない所から、長町端の往來に出て、荷物小揚に雇はれ、三十、五十の賃錢を取つた、けれども、之とても、馴れた人には叶はず、最早朝夕の煙も立てがたく、幽かに其の日を送つて居た、妻は夫の爲め、身を賣りてなりとも、此の難儀を救はんものと、千々に心を碎き、種々心配をした、夫が爲めに却つて病は重り、頃日は枕も下らぬほど、彌よ食が咽喉を通らない、併しながら數右衛門は、夫を一層不便と思へば、少しも怯まず、當歳の子に摺粉を與へ、兩人の介抱をした、其内に彌よ益々渡世に盡き果たから、彼の稱名寺へ行つて、伯母に幾分か惠みを受けようと、或日大小を手狭み、日暮過から我家を立出でた、丁度尼ヶ崎を越えて程もなく武庫川へ出る、生憎其の日は寒風烈しく、往來は途絶えて居た。

其の時に數右衛門が心中に、
「武士飢に勞るゝ時は、強盜をなすとも耻辱ならずと聞く、寧ろ之は旅人に無

心を言ひ、助力を乞んか……いや、人を害め、衣類金銀を取りては、人道に外るゝ事、我斯る切迫の砌なれど、非道の財寶は貪らず、價を以て旅人に無心を言ひ、助力を乞はん」

と應て向ふの河原の經よい所に待掛けて居た、けれども數右衛門は、大小を挟み、山岡頭巾を被り、さも恐ろしい人相であつたから、偶々往來するものがあつても、其の姿を見て、強盜であらうと逸足出して逃げる爲めに、逆も側へ寄つて無心などは言はれぬ。そこで數右衛門が心付き、之は我が形相の恐ろしいが爲めであらう、よし、然らば腰を卑くして進み出でやう、而して御無心ながらと言出す一言の胸を劈くが如くであつたから、忽ちドツカと地に座して、拳を握り、

「淺猿しや、不破數右衛門とも言はるゝ身が、露命を繼がんが爲に手を下げて故なき人に合力を受ん事、人外とや言はん、口惜」と、義氣も碎けて打涸れたが、又氣を取直して、

「いや、耻辱も無念も時にこそよれ、是非難澁を凌がん」と又も氣を取直して、

「我等、山岡頭巾を着たればこそ、追剝と人も思ふであらう、面を現し、大小を取つて、柔和に見せ、而して無心を言はふ」

と應て身臍ひをして待つて居た。

所に、垂駕の棒端にブラ提灯を下げ、供をも連れず、道を早めて來る者がある。さてこそ良い所へとバラ／＼と走り寄つて棒端を押え、

「あいや、拙者は浪人者でおざる、貯えを失ない、今日の露命が立て難い、何卒御合力を以て露命を繼ぎたく存ずる、富有者とお見受け申し御無心仕つる、何卒お聞き濟みあつて御合力頼み入る」

と言ひながら、確乎と押えた棒端は放さぬ。之を見ると駕昇が駕籠を其所に卸して、

「な、何だと、ヤイ盗人め、浪々中困るから金を呉れと、見損なやがったか、己を誰だと思ふ、大阪三郷で山猿の六といやア知らねえものは無えんだ、手前達のやうな奴に脅かされて金を出すやうなンぢやねえ、以後の懲戒斯うして呉れる」

と言ひながら、駕昇二人は息杖取つて左右から打込んだ。

數右衛門固より武藝は達者ヒラリくと轉して居たが、手許へ跳り込むと一人の足を拯ひ一人の腰を蹴たから堪らぬ、二人の駕屋は餅重ねとなつた、其上に跨がつた數右衛門は、

「やい、汝等雲助の分際として盗人呼はりは奇怪至極、浪人して爲すべき業なれば據ころなく、難儀を包ます咄すのだ、然るを何の返答もなく、己れの旦那に一言の挨拶もなく、理不盡の杖三昧斬つて捨る奴なれども、一命は助けて遣はす、汝等如き雲助の、五人や七人出たればとて、驚ろく此方ではない、併し

しながら無益の殺生はいたさぬ」

と言ひながら大小を取つて腰に差し、駕籠の前に手を仕えて、

「駕籠の中なる人に物申す、全たくの困窮、浪人ながら僞はりは申さぬ、御無心頼み存する」

始終の様子を最前から駕の中で見て居たのは一人の武士、駕の垂を上げて、

「提灯を貸せよ」

と言ひながら立出た、是別人でない同家中であつた速水藤左衛門であつた。

「不破殿、お久しふ」

と聲を掛けた。

聲を掛けられた數右衛門が、其の武士の速水なる事を知つた時の面目なさは又格別であつた、答さへ出ぬ、差俯向いた。

速水は早くも夫と推して、

「あいや不破氏、切取強盗をなして露命を繋ぐは武士の常、何ぞ耻辱とするに足ん、先づ堅固の對面、拙者に於ても大慶に存する」

と叮嚀に言つて、廳で駕鼻を先に返し、言葉を改めて、

「さて不破氏、此度の一條お聞き及びでもござろうが、主君御生害に付き、御國の騷動一方ならず、夫に付き、拙者江戸表へ火急に參る、能い所で對面いたしました、貴殿も然こそ残念に思はれるでおざらう」

と物語るを聞いて數右衛門涙を流し、

「さればでおざる、我等血氣に任せて種々悪行をいたし、到頭お暇になり、今の有様、亡君の御大事を聞き、直様赤穂へ馳下らんとは思ひまいたれど、妻の大病に貯へも盡き、朝夕の煙さへ立て兼、依て晝は聊さかの殺生して賣り代なし、生業をすれど、之とても勝手知らねば抄取らず、今宵此處まで參つておざるが、東明寺村の伯母を便つて妻子を頼み、少々の路銀を乞受けて、赤穂へ下

り、委細を承はり、其上仕方もあらうと存じたが、貴殿に逢ふは未だ武運に盡きざる所か、最前も申す通り、主君の御恩を送らん爲の志ざし、御推量下されたい」

聞いて藤左衛門は、

「さてく驚ろき入つたる貴殿の心中、斯る身の上なれども、非道邪なく、天晴武士の魂ひ、此事内藏介殿へ達せんに、何卒命を全たうして後日を待たれよ、深き所存あれども途中と言ひ、急ぎの道、追て御話し申さん、些少なから當分にて凌がれるやう」

と二兩の金子を取り出して與えやうとした。數右衛門は、

「是は御深切忝じけなくは候へど、路用を申し受けなば、長の道筋御不自由でおざらう」

と辭退するのを藤左衛門は、

「いや、其の議は心配御無用、他にも用意おざれば、是非に……」

「然らば拜借仕つる」

「御遠慮なう」

「忝じけなうおざる」

茲に兩人は右と左りに別れ、藤左衛門は江戸へ下つた。數右衛門は之に力を得て、其の勢ひで東明寺村の伯母の方へ来て、一伍一什を物語り、

「何卒頼み入る」

といふと伯母も、誠に氣の毒と思ひ、之までの難儀を察して、快よく承知して呉れた。

「早う連れまいて」

「有難うおざる、さらば……」

と一旦長町の我家へ歸つた。早速妻を東明寺村へ送らうとすると、妻の病ひは漸々と重つて、遂に去る夕、亡き人の數に入つた。

數右衛門今は詮なしと、涙と共に遺骸は附近の寺へ厚く葬むり、當才の娘を連れて東明寺村へ行き、其の理由を物語り、長刀一口を添えて、是を預け、而して己れは赤穂へ下つた。

此の當才であつた娘が此の寺に成長して、其の名を綱といつて七十餘才で此所に命を終つたといふ。

随分出鱈目も斯くまで旨く行くと面白い。就中、數右衛門如き高潔無比の武士が剽盜をしたといふのは實に愚説も甚はだしい、亦其の駕の中の主人公を、舊友速水藤左衛門であつたとしたのは作者も中々骨の折れた話であつて、世の中に恣麼、狂言のやうな事實があつたなら甚だ滑稽である。

夫から後の數右衛門に付いては斯ういつて居る。

赤穂籠城を豫期して内藏介の許へ馳付けて、己れが意中を悉く披瀝した、内藏介も其の熱誠なる志ざしに感じて遂に黨中に加えたのである、と。
雖然、事實は前述の方にあるので、茲には只筋に於て餘りに面白く書いてあるから記したまでである。

近松 勘六行重

近松勘六行重は、故内匠頭長矩に事へて、馬廻に列し、祿二百五十石を食んで忠勤を勵みつゝあつた名節の士である。彼の先は、近江の國蛭田の里より出で、淺野彈正少弼長政に事へた武勇の家筋であつた。それで家世相承けて、遂に勘六の代に至つたのであるが、當時奢侈淫風は靡然として一世を厭し、人みな其の風に誘はれて餘念もなきに拘らず、流石は彼れ勘六、家聲に一點の汚れも染めず、ひたぶる兵法を好んで、俗輩中に樹立する所あつた。

其の凶變發して以來、赤穂を退散するに及んで、彼も亦舊里に歸つて、暫く隠棲して居たが、心既に決する所ある彼は、一日朋友知己を家に會して、其の所有する所の田宅重器一切を擧げて、人々に分與し、颯然として立去つたといふ。
斯くして恬澹無慾の彼は、其の年二月、内藏介が命を受けて、吉田忠左衛門ともく、關東急進派の面々と、一擧の計畫を打合すべく、江戸表へ下つた。爾來森清助と變稱して大いに力むる所あつたが、同年八月、潮田又之丞の下向するに及び、再び上京して内藏介に江戸の近情を報告せんが爲め、又之丞と相伴うて京都に出發した。で、暫くの間内藏介が四條の道場に足を駐め居るうち、愈々十一月の一日に至り。一同が江戸に下るといふことになつたので、彼も亦内藏介等が一行に加はつて、再度下向した。時に先着の吉田忠左衛門は、新麴町六丁目、兵學者田口一真と稱して往居し居つたので、彼も亦これにならつて、田口三介と變稱し、石町三丁目なる大石父子のもとに同寓して居た。後更に三浦十右衛門と

稱して、専心世の注目を避くるかたはら、敵情の偵察に苦心し居つた。

茲に猶感すべきは、其の僕甚三郎の一事である、彼は主人勘六が君國のために斯く盡瘁するのを見て、何卒其の一端にも相立たんものと、影になり日向になりして、骨身を惜まず忠實に働いて居た。

勘六が再度東行の際、即ち十一月の月初め關東に向つて下り行いた時、彼は其の主人に従うて是亦江戸に到つた、そして同じく石町三丁目に住居て、何くれとなく主人のために立ち働いて居るうちに、討入の期は追々と迫つて來た。そこで勘六は彼に暇を取らせて、郷里へ歸さうと思ひ、一日其の膝下に呼んで此の旨を諭した。すると彼は恨めし氣に主人を見上げながら、

「こはお情けなきことを仰せられますことかな、不肖甚三郎お國を出でまする時より、旦那様をはじめ、皆々様の思召立たれましたる事の大凡は存じて居りまする、ぢやによつて斯く當地に御供申上げ、故郷を出發いたしまする際、

老父の申しまするには、此度御主人の關東下向は、容易ならぬ大事の御用と存すれば、随分と精を出して身命をなげうち、年頃日頃の御恩の萬分の一に報いよと懇々いはれておざりまする、私もそれゆゑ、及ばずながら其の言葉の反古にならぬやうと日々心掛けて居りまする今日、斯く永の御暇を下されうとの御意、畢竟此の甚三郎が能く物の御用に相立たぬとお見限りなされての御事でおざりませうか……さらば是非もおざりませぬ、不肖ながら此の甚三郎、退いて覺悟の仕りまする」

と忠義に凝つたる甚三郎が、決死のほどは涙の面に歴々と讀まれた。

勘六は是を見て、今更ながら彼が心根の殊勝らしきに甚く感動し、

「あゝ何時に變らぬ其方が忠義のほど、勘六身にしみて嬉しく思ふぞよ、それにつけても其方が斯くまでに言ふからは、兎角聞き知らせるまでもない、其方が察する通り實は是々斯々の次第、なれども内藏介殿よりの御吩咐として、此

度の企圖には故内匠頭様に御奉公いたした赤穂の藩士のみ限り、其の他は如何なる縁故のある者とても決して同行罷りならんとの御嚴令、よつてそれなく其の方に暇を取らせんといはした次第ゆゑ、必ず悪うは思うて呉れるなよ、
喃う、今いふた通りのことなれば、折角其方が思立ちたる氣を屈くは心ならねど致し方もない、決して恨みに思うて呉れるな」

と深く慰諭したので、甚三郎も今は仕方がない、本意ならねど僅かに首肯して、「左様なれば甚三郎、思ひ断めておざりまする、此の日頃不肖ながら、皆様が思立たれた御一擧の漸く近づかれし御様子に、内々指折り數へて樂しみ居りましたなれど、左様な御趣意とおざりまする上は、それに背きましてまでも、御同行を願ふといふこと、却つて旦那様の御迷惑におざりませうゆゑ、今は決して御願ひはいたしません、たい此の上の御情には、何卒御討入當夜、せめて途中までなりとも、御供を御許し下されまするやう、甚三郎一生の御願ひにおざ

りまする」

と熱心色にあらはれて申し出でた。勘六もいよく感嘆して、請はるゝまゝに其の願ひを許しやつた。

さるほどに其の當夜となるや、彼れ甚三郎は健氣にも甲斐々々しく扮装つて、主人勘六の後に引添ひ、いそぐとして警家の門前まで來つた。と一黨は討入る戦は始まる、劍の響、矢叫の音、修羅の巷は忽ちに展開せられた。門前に佇んで様子如何にと伺ひ居つた甚三郎は、一黨の身に恙なかれとこそ心中に祈念を凝し居るうち、やがて凱歌はほのくと白み行く曉の空の反響して天地をゆるがすばかり、甚三郎は躍り上つて喜びつゝ、何時何處で何う調へ來つたものか、兩の袂にはち切れさうなほど、蜜柑、餅の類を入れて、今し威風凛々氣色満面の人々を迎へながら、

「これはく皆様、お目出度う存じまする、おいしくはござりませぬど、御息

つぎまで召上り下されませ」

と萬遍なく一同に頒贈したので、人々は大喜び、

「これは辱じけない」

「イヤ何うも有難い」

とばかり、甚三郎が心意氣に感せぬ者はなかつた。後彼は、其の主人勘六行重が、細川家で切腹したと聞かや、谷中長福寺の佛弟子となつて、主人の冥福を祈つたといふ。

勘六が其の御預中、時に思出しては彼が忠志に涙を浮めたと噂されたも無理ならぬことである、實に主といひ僕といひ、美しい心ではないか。

其の甚三郎の心が通じたものか、勘六が讎家にあつて奮激突戦の真最中、一敵に遭遇した、彼は早くも一太刀をそれに浴せかけざま、猶も踏込みく斬り入つたので、流石の敵もかなはじと思ひけん、汚なくも太刀を肩に後を見せた。勘

六は機に乗じて逃さじものと、後を追ひ掛け行く途端、危ふくも薄氷はりつめた泉水の中へ、ザンブとばかり落入つた。此の時敵が返り合せたならば、すんでのことに殺りつけられたであらうが、幸運にも敵は其のまゝに逃げ失せたので、思ひがけない命を拾つた。其の際彼は手を地について傷ついたが、些したることもなかつた。翌年二月の四日、一黨の人々と共に、細川邸に於て、横山作之丞が介錯のもとに、美事三十四歳の腹搔斬つて相果てた、其の法號は「乃隨露劍信士」。

富森 助右衛門正因

助右衛門の父は孫太夫と言ふて、淺野侯に仕えて留守居を勤めて居た。

言ふまでもないが、此の留守居なる役は、藩中に於ても頗ぶる重い職掌であつて、孫太夫が其の重要な職に任じて居た事から想ふても、其の人の器量は伺ひ

知る事が出来やう。

其の子の助右衛門も、父の後を継いで、二百石を食んで馬廻りの役に兼ねて御使役をして居た。

其の使役に就いたのが、未だ十九歳の時ではあつたが、其の役を空しうせまいといふの心から、其日から直ちに馬一頭を養なつたといふ事だ。

此の一事に見ても助右衛門の尋常でなかつた事が分るではないか。

夫かあらぬか、即ち其の職責を完全に盡すの時に到來した、夫は何であるかといふに、元祿六年十二月、水谷家断絶の際であつた、淺野内匠頭が、時の將軍から、水谷家の領地備中の松山城受取の役を命せられた事がある、で、直ぐに此の由を國表赤穂に在る家老大石内藏介の許へ即刻通せねばならぬ、さうして其の準備に及ぶのである、其の時の使番に選ばれたのが即ち富森であつた、其の折に百五十餘里の道を僅か六日にして播州まで飛んだといふに至つては、實に彼の

平生の心掛けが思ひやられる。

夫に又一ツ此の助右衛門には不思議な事があつた、夫は何であるかといふに、如何なる時、如何なる場合に於ても、金子を二十兩肌に付けて居らぬといふ事は恐らくなかつた。人が恠しんで其の理由を問ふと、助右衛門は常に斯う言ふた、

「左様、武士たる者は、何時如何なる變に出會はんとも限らぬ、亦如何なる御用を上から仰せ付けられぬとも知れぬ、其の時の用意に斯くは所持して居るのである、若し然ういふ場合に、厘毛の用意もなかつたなら、夫こそ武士の面目の立ち得ぬ時もおざらう」

といつたといふ、實に武士は斯くありたいものだ。

夫に最とも此の人の優れて居つた事は、言語明晰であつて、一度事理を論ずると、必らず其の意を貫徹したといふ、先輩で吉田忠左衛門、後輩で此の助右衛門とまで號されたものだ。

又其の子にして其の母ありて、助右衛門の慈母も頗ぶる女丈夫であつた事は疑ひがない、夫は彼の凶變が起つた時に助右衛門を招んで、

「内匠頭様は切腹を仰せ付けられながら、吉良殿は其儘に捨置かれるとは、近頃片手落のお捌きではないか、此上は最早是非に及ばぬ」

と口に出して夫とは言はなかつたが復讐せよと我子を勵ましたといふ位であつた。

此の他にも種々あるが先づ概略にして置かう。

併し此の人に付てはどうしても言はねばならぬ一事がある。夫は、武備あるものは必らず文事ありて、斯くの如き武人ではあつたが、頗ぶる俳諧に付ては造詣が深かつた。夫は彼の大高子葉が快擧の旦、師の沾徳に贈つた書翰中に、

春帆、竹平も同じ道に候、涓泉は御存じの如くに有之候
とある、子葉は大高源吾で、竹平は神崎與五郎、涓泉は萱野三平、春帆は即ち此

の富森助右衛門の號であつたのだ。

生涯に詠んだ句の數は殆んど大冊を爲すであらうが、先づ一二を摘んだら斯んなのがある。

夕立や人にもくれず海の上

上みれば限りなしとや百合の花

夕顔に馬の顔出す軒ばかな

此の次はくと思ふ花火かな

冬鴨の身はむしらるゝ行衛かな

などいふのだが、夕顔に馬の顔出すなどは絶妙といつても宜からう、夫に冬鴨の身はむしらるゝ行衛かなの句は、俗に寒鳥のと言はれて居るやうだ、併し之は何方かといへば鴨のと言つた方が宜いやうに思はれるから、之に掲げる事にしたのだ。

夫から次の大高子葉の句中の二三を餘事ではあるが、特に茲に載せることにした。

日にやけていざ笑はれう山櫻
初松魚江戸の芥子は四季の汗
短冊に萩大名や句談合
ぼたくくと落る椿のおぼる月
源氏畫の疊の形や草のもち
春の野をたい一呑みや雉子の聲
等がある。

復讐の明年、春、合歡堂で追悼會があつた、之は大高子葉の爲めに催されたもので、師の沾徳や其角が會合したのであつた、其時の追愁の句に
なき跡も猶梅のめうどかな
沾 徳

鶯に此辛子酢は泪かな
其 角
枝葉まで名残の霜の光かな
沾 州
其骨の名は空にある雲雀かな
貞 佐
右は大高に關する句であるが、俳友として茲に掲げた。
さて助右衛門は首尾能く本懐を遂げて細川家へ内藏介と共々預けられた、然うして彌よ二月四日最後といふ時に堀内傳右衛門に向つて、
「我等、他に思ひ遺す事はおざらぬが、只一人の老母が……」
といふた、老母は其時或知己の許に居つたので、最後まで母を思ふ心は失せなかつた。
其時に堀内は、
「其の事は我等儘かに承はつておさる、お心安う……」
助右衛門は莞爾として喜ばしさに、

「何分……」

と頼み置いて、さて辭世の一首は懷中から取出された。見ると、

四日は姉の忌日なれば

先立ちし人もありけり今日の日を

ついの旅路の思ひ出して

とあつた、飽まで風流は離れなかつた。斯くして潔ぎよく自及した、介錯人は細川家の家臣で氏家平九郎と言ふ人であつた、行年三十有四、法號は「及勇相劍信士」。

倉橋傳介武幸

倉橋傳介武幸は、内匠頭に事へて二十石五人扶持を頂き、中小姓にして扶持奉行を兼ねて居た武士である。彼については、餘り傳記がない、尤も講談や浪花節

によると、彼はもと小石川馬場に住居をいたした、三千五百石の長谷川丹後守といふものゝ次男であるといふ。初めの名は金三郎といつて、若氣の過ちより放蕩に身を持ち崩し、遂に勘當といふことになつて長い間、彼所此所と流浪し歩くうち、不圖したことから淺野家に事へることとなり、組足輕といふ極く低い役で召抱へられた。ところが或る機會からして、内匠頭の面前で弓馬の達人たる腕前を顯はし、遂に新知百石で召出されたといふことが傳へられてある。そして内匠頭より改めて、金三郎の父丹後守のもとへ、勘當の詫を入れたので、茲に親子久しぶりの對面をしたが、義理がたい親父の丹後守は其の縁を切つて、倉橋傳介と名を變へさせ、永く内匠頭に事へて忠義をつくせと、深く教訓したといふ面白い話がある、もとより根なし草たることはいふ迄もない。

兎に角彼は、一番解散となつた後は、本所二ツ目相生町なる前原伊助の米屋五兵衛方へ番頭として住み込み、昨日に變る前垂姿も可笑しく、揉手をしながら上

野介が動静を窺つて居た、そして矢張り、屋根の火の見へお百度詣りをした連中の一人だったのだ。

其の切腹した時は、年三十四歳の血氣盛り、毛利邸で田上五左衛門の介錯にて一黨と共に、夕の露と消えたのである、彼の法號は「刃鍛鍊劍信士」といつて、泉岳寺境内の中央、西に面して建てられてある。

武林唯七隆重

武林唯七の祖先に付ては頗る面白い話がある、夫は彼の文祿の朝鮮征伐の時に、明軍と戦かつて多くの捕虜を我國へ伴れて來た事がある。

其の捕虜中に名を孟二寛といふ者があつた、産地は浙江省杭州府武林の人であつたけれども、不幸日本軍に捕はれの身となつて送られて來た、無論助からう意はなかつたが、秀吉は之を助命せよと命じたので、別に生命には及ばなかつた。

そこで醫術の心得が多少あつた所から、醫者になつて、己れの故郷を其儘苗字にして武林次庵といふて歸化したのであつた、其の子は即ち純然たる日本人となつて、名さへ渡邊半右衛門と稱して淺野家へ仕官した、唯七は其の子であつたのだ。

然うして唯七は十兩三人扶持の小祿を食んで中小姓を勤めて居た、併し、天稟に彼は慷慨義烈の士であつて、武藝のすぐれて居た事は、先づ四十餘名の義黨中に於ても異數といふて宜からう。

けれども彼が如何に氣を負ふて居たかは、自から孟軻氏の後裔であると號して渡邊の姓を改めて、更に祖父の姓に復し、武林唯七孟隆重と呼んだ一事に徴しても明らかである。

能く講談師なぞが演ずると、唯七は頗る疎勿者になつて居るやうだ、彼のお使ひの途中に於て、鐵砲洲方面の火事と聞き、大切な花であるのを打忘れて、馬

に鞭つて飛ばしたとか、或は使ひに行くべき大名の家の隣り屋敷へ入つて、使者の間に通され、始めて間違ひである事を知つた、所へ應接の武士が出て、御用は……と聞かれた時に唯七は苦し紛れに飯を頂戴したいと言ふたといふ、まだ其の他にもいろいろあるやうだけれども、要するに夫は悉とく妄説であつて、取るに足らない。

併しながら、唯七が大石のい、え、え、えのを憤慨して、内藏介に構はず、吉良上野介を討つて了はうといふ計畫を立てたといふの一事は掩うべからざる事實であつて、慥かに義黨中に於ての急進派であつたらしい。

水野家へお預けになつて彌よ切腹と定まつた時に辭世の一絶を賦した、夫は左の如くである。

三十年來一夢中

捨生取義幾人同

家郷臥病雙親在

膝下奉歡恨不終

いざ切腹となつた時、介錯人は神正右衛門と言ふ人であつた。

唯七は端然として其の座に着いて、短刀を取上げ、已に腹へ當てやうとする所を正右衛門が、

「エイッ」

と聲を掛けて斬下したが、心臆したのか、手が狂つたのか、頸の半分まで斬込んで討損んじた。

所が唯七は一度前にドーと倒れたが、流石は唯七である、其の重傷に怖れず、徐かに身を起して、斯う言ふた、

「お静かにお討ちなされい」

正右衛門もハット氣を籠めて、

「承知いたしました」

と言ひもあへず再び打下ろした刀に身首を異にした、之には實に檢使を始め

此の席に列なつた役人一同感嘆措かなかつたといふ、如何に唯七が豪毅であつたか察せられるではないか、行年三十二、法號は「刃性春劔信士」。

大高源吾忠雄

「何のその巖もとほす桑の弓」の唯是れ忠義一圖に凝り固つて、しかも文と武とを兼具へたる大高源吾忠雄は、同姓源右衛門の長子にして、其の人となり俊爽、又氣節に富み兼て文雅の嗜みが深かつた一個の大丈夫であつた。彼が打物執つても大剛の者であつたことは、警家に討入の時、薙刀を欺くばかりの大太刀を揮つて、目覺しき働をしたのでも知れるが、一面に於ては茶事を好み、俳句を喜び句道にかけては、益を水間沾徳に受け、俳名を子葉と號した、是は沾徳が初號沾葉と稱したに因んだのであるといふ、従つて彼は、一時の作家其角、沾州、貞佐等とも交深く、其の唱酬も間々散見する。彼は二十石五人扶持を食んで、中小

姓から、膳番元、金奉行、腰物方などを勤め、實に洒々落々たる人物であつた。其の父源右衛門といふは、廣間番を勤め居つた人であるが、名代の能忍者で、一度失敗つては、赤恥を搔くことがあつたといふ、それが爲めに自然一家中の評判者であつた。で、彼は不思議な月代の名人であつた所から内匠頭の父采女正の御髮を度々上げて居つた。或る時のことである、月代半に剃刀の柄が抜け掛つた、總て大名の月代を剃るには、剃刀數十挺を研立て置いて、剃刀に木の柄をすげ片手で剃るものだといふ、源右衛門もよりの能忍者ゆゑ、抜けかゝつた剃刀の柄をもつて、場所もあらうに殿の頭でコツリ、打込んだから殿様も驚いた。

「痛いッ」

といひさま、思はず、

「何をいたす」

との仰せに、ハツと氣のついた源右衛門、

「南無三、しまつた、此奴は大變ぢや」

とばかり、剃刀片手にスタ／＼御前を逃げ出して自分の宅へ歸り、ひたすら恐れ入つて居た、御近習は驚いて、殿の御前へ恐る／＼手をつかへ、

「源右衛門、斯様の不調法を仕つる、屹度閉門申し付けるでおざりませうか」殿様も思ひ出すと可笑くつて堪らない、

「イヤ捨て置け／＼、彼が兪忽は今に始めぬことぢやから、敢て閉門には及ばぬ、免し遣はずほどに、月代を申しつけい」

そこで源右衛門も始めてホツと一息、御免を蒙つて出勤した。斯くて後御年回りのあつた時、御本家安藝守の屋敷に見事な杜若が今を盛りと咲き亂れてゐたので是非と御所望せられ、即ち源右衛門に使者を仰せ付けられた。そこで源右衛門は霞ヶ關の屋敷へ立越え、口上を申上げた所早速御承知あつて杜若の見事なのを下された、彼は是を受取つて安藝守の屋敷を立出で、道々思ふに、

「何うも拙者は兪忽者で困るて、今お屋敷から杜若を頂いて參つたが、又何かの不調法を仕出來さねばよいが……さうぢや、是は一番自分自身が持つて行くに若くはあるまい」

と、馬上に杜若の花を携へ、トツ／＼トツ／＼と急いで歸るといふと、

「火事だア、火事だア」

といふ聲、往來の者に何處からの出火かと尋ねると、八丁堀邊とのことで、屋敷々の板木、太鼓は鳴出す、火元見は乗出す、火消役も追々繰り出すといふ騒ぎに、源右衛門は主人の屋敷心元なく思ひ、今は前後の思慮なく、一散に馬を飛ばせて手に持つた杜若も何も打忘れ、早速の鞭として馬の尻をば打立て叩き立て、お屋敷へ乗り歸つた處、幸ひにして早火も鎮つて別状なかつた、源右衛門は御前に出で、御返答を申上げ、

「いと見事なる杜若、進せられましたとおざります」

と言上した。采女正は、

「それ見せい」

と、何事も御存じないから、さぞ見事な花であらうと思ひ、お尋ねあつた。是れに氣のついた源右衛門、ハツといふたまゝ御前を退いたが、覺はずも途中で鞭の代用にしたのだから、花は愚か、葉一枚もありやアしない、又しても失敗つたかと地團太踏んだが追付かない、是れア何うしたのかと家老の安井彦右衛門に實は斯様々々云々でと、仕方がないから有の儘に届け出でた。彦右衛門も是を聞いて、毎度ながら源右衛門の魚忽、可笑しいには可笑しいが、又氣の毒でもあるので、御前に出で、

「實は源右衛門、斯様々の次第にて、花は途中微塵になりましておざりますと申し上げた。殿にも是を聞かれて、

と申し上げた。殿にも是を聞かれて、

「彼が魚忽は今に始めぬこと、殊には主人の屋敷、近所の出火と聞けば、誰にても狼狽へ、早く駆付けやうと思ふものぢや、今日の過失は火事の業ぢやほどに、聊か咎むべき筋はない」

と、却つて御賞美あつた、失敗つて賞められたのだから、源右衛門餘程嬉しかつたに相違ない。それからといふものは、益々忠勤を勵んでゐたが、何うも生れながらの魚忽は、容易に癒らないものと見え、又々失敗をやらかした、といふのは其の冬の事であつたが、御客來があるといふので、室咲の梅、やうく一輪開いたばかりなのを、御馳走の爲め床の花活に生けさせられた、其處へ源右衛門は何心なくやつて来て、見ると早咲の梅一輪、馥郁たる香を放つてゐるので、

「ホ、ー、これは珍らしい花ぢやわい」

と、矢庭に摘まみ切つて、鼻の穴の處へ押し當てながら、クンクンやりだした處へ殿様が何か御用があつたと見えて、此處へお出でになつて見ると、源右衛門

が頻りに鼻をクンクンやつては喜んでゐる。

「コレ、源右衛門、其處に何をいたして居る」

「ハ、ツ、これは殿でおざるか、唯今源右衛門、梅が香りいたしまするかと思ひ、嗅いで見て居る處でおざります」

見ると、大切の梅一輪、無残にも源右衛門の鼻の穴の處に咲いてゐる、イヤ怒つたの怒らないの、殿様非常の御立腹、是はさうだらう、切角大切にして辛と咲かせた許りの花を、御客様の御馳走にと生けて置いた花をしてやられたのだから無理もない。

「コレ、源右衛門、如何に兪相なればとて床に生け置いたる花を取るとは不届至極な奴ぢや、珍花であると思へばこそ、今日の客來の馳走になしたるを、摘み取つて香を嗅ぐとは、いやはや以ての外、他に代りはないのぢやぞ、コレ、源右衛門」

「ハ、ツ」

源右衛門、蒼くなつて恐れ入つた。併し殿様も、一旦の怒のあまり、厳しくはいつたもの、思へば罪もない悪戯なので、段々怒も和らいで、

「コレ、源右衛門、其方は誠に正直な者ではあるが、生來の兪忽ゆる斯様の過を仕出來すのぢや、今日の處は許して遣はすにより、以來は屹度慎しめよ」と仰しやつた。處が源右衛門、返事も爲ない、しないも道理、彼何時の間にか

鼻から提灯ブクブク、涎を垂らしてグーグー鼻をかいて寝込んで居た、是には流石の殿様も呆れて、言葉も出なかつたといふ、何處までも滑稽に出來上つてゐた男だ。と此話しも甚だ滑稽過ぎる。

源吾忠雄は、斯かる人の子であつたが、幼より文を好んで、其の詩想又なかなか幽遠なものがあつた。彼の丁丑紀行の如き、其の一斑や概見するに足りるであらう、依つて左に掲げて、彼が詩想の一斑を窺ふも、亦何等かの興があらうと

思ふ。

丁丑紀行

大高子葉記

文月九日、朝曇りて涼し、卯の刻に馬をすゝめ、いきほひ百里の空に向へば、例の誰かれ門送りて、馬の上、舟の渡り、道すがらの事ども、何ぐれこまやかに、心ざしを餞別して、わかれを慕へば、今更江戸の名残も惜ふて、

秋風の嬉し悲しきわかれ哉

旅珍しき心に、道のほども近ふ覺えぬ、ことなる事もあらず、戸塚に御止宿まします、十日夜中より雨降る、藤澤遊行の寺にて、

上人の御留守久しや秋の雨

酒匂川にわたりなしとて、大磯の御止ります、鴨立澤へ立寄り、三千風を訪ふに、留守なりければ、庵を守る者に申し置き侍る、

合羽着て鴨立跡に迷ひけり

十一日三島に御やどりまします、はたの茶屋にて各々餅などたふべ侍りて、

朝霧に鮮の匂ひの覺束な

さいの河原となんいへる波打際に小さき塔を組て鼠尾萩のしをれたる一もとに土人形のふりたる二ツ三ツならべ置きたり、いかなるものゝ子を先立けんとなり、

さもあらんさいの河原や盆の前

十二日奥津に御止宿まします、申の刻さつた山にて村雨す、いさごのぬれわたるいと涼しげなれば、下道の道を通るとて、

稻妻と走りぬけり親しらず

十三日晝より雨降る、宇津の山にて、

萬人の笠の雫か蔦の雨

入逢過る頃ほひ、金谷に至る、今宵こそなき人の來なれとて、旅店も物静に設

けなし門火、

川越しもいんと帯して門火哉

十四日終日雨天、袋井の御旅館に至りて、御座所の設け何くれ取つくろはすれば、蘭の香遠くもてく、かたわらなる障子をはづせば、はれやかなる庭の構へ異なる物者も侍らず、只松、柏、もつこの外に蘇鐵南天のみなり、石室に蘭の盛なるあり、あるじの心ばせいとゆかしく、各々晝餉す、盆のいりひなりければ、もてなしもからびて、

夕顔のさしみに蘭の匂ひ哉

見付の宿へのぼれば、半道ばかり東の方、大久保といへる村のはづれに清池あり、丸池といふとぞ、池のかたちの丸ければなるべし、水の色きはめてみどりに、露草の花には一しほ二入増りて、こゝ見え侍り、立よりて掬するに、ひやゝかさ醒が井にかはらず覺ゆ、

手拭に桔梗をしぼれ水の色

今日濱松に御やどりまします、夜にいれど者共二三十人づゝ打むれて、聲のかざる念佛申して、鉦太鼓をたゞき、夜すがら廻る、かゝる魂祭り、餘處にも侍るやらんと問へば、あるじの語る、味方が原御合戦の後、戦死の者どもを御とぶらひのため、東照宮より仰事侍りて、今に至りても年々かゝれりとぞ、御城主よりも警固など美しく御沙汰ありと見ゆ、

聖靈もうしろ見せぬや夕顔馬

十五日雨降る、白須賀に御休ます、鹽見坂を攀のぼりて、右の方に富士山また見えたり、今一足二足行けば、此の山も見えずなりぬるといへば、

秋霧の富士もさらばよ鹽見坂

十六日よべより空晴て、ほしの影さらゝかなり、赤坂の御旅館を夜に出る、法龍寺の邊りまでは、いまだ明けぬべくも見えず、右の方に當りて太鼓にもあら

ぬものゝ夥敷響き、同じ調子の聞えていぶかし、駕籠まはせる男にとへば、
鹿猿のおほく畑物をあらせるを追ふとなん、谷に大きな瓶をふせて、山川に
車をしかけ、瓶を埋し上を打せけるとぞ、

だまされて鹿の鳴音を哀なる

十七日順風に渡海す、七里をたゞ半時ばかりに至る、

雁金も追ひてに渡れいせの海

桑名に御休足まします、今日此處の鎮守春日大明神の御神事とて、家並に棧敷
を構へ近住隣郷の男女僧俗いやが上におし合ひのゝしる、やどせしあるじも、
子供の祭りに出けるとて、赤飯さらへ殊の外にまふけなして馳走顔なりければ、
こなたも祝儀などとらせけり、祭禮の次第善つくせり、さすが王城遠からざれ
ば、田舎めきたるけはひもあらず、抑々此御神事をひやうりと申すよし、いか
なる故かとへば、祭禮は八月十八日東郷よりの御沙汰なりければ、城主の御

はからひとして警固も威儀をたいてして下さまは見物もたやすからすと、けふ七
月十七日氏子供の私にいさめ申す、よつて裏と名付け、八月十八日を表とす、
然るを下臈の何となくひやうりとのみ申すやうなりとかたる、さもあるべしや、
葛の葉の裏を先見る神事哉

十八日日和よし、桑名を夜に出で、一里あまりに朝日川をわたれば、漸く東の
空白けたり、

百舌鳥鳴てはのくあかし朝日川

大神宮への追分なり、餅を喰ふ、

追分やまねきみだるゝ花薄

十九日關の御旅館を日の出にわかれ出ぬ、山路なれば、馬より下りて行く、こ
れより坂の下迄の道すがら、木のふり、山のたゝすまひ、風景他に異なり、一
の瀬といへる所へ取つく、右の深山を古法眼が筆捨山といふより、げにも此の

山の粧よそはひ神仙しんせんもといまりぬべく見ゆ、

どの様な朱筆しゆび成なりけん秋あきの山

鈴すず魚かの坂さかをのぼりて、猪ぶの鼻はなとかいへる所に山家やまがあり、所ところがらの私雨しうあらし嵐あらしもはげしくて身みにしみわたれば、

猪ぶのはなやわせのもまるゝ山嵐やまあらし

蟹かにが坂さか、かにかが石塔せきたう、幻まほうの様やうに見ゆ、廿日かみなごち水口みづぐちを出いで、横田川よこたがはを渡わたる、既すでに東武とうぶを出いで、十餘日じゆじつ菅笠すげがさは、いきも旅たびなれ、石川いしかはの清きよげなるにはかちわたり用捨ようしやせまほしく覺おぼえて、

さひ鮎あゆに柿かきの脚胼きゃはんや横田川よこたがは

粟津あはづが原義仲寺はらよしなかつでらへ参まゐり侍はべりて、先翁せんおうの隠かくれ給たまひし塚つかに向むかへば、いつしか四よとせの露霜あきつゆを経て、秋あきの草くさしほれがちに、しるしの芭蕉はせきものわきにやぶられぬ、水みづひけ申し、合掌あがつしやうするにぞ、例れいのこゝろ涙なみだいとけやうし、西受口さいじゆうぐち闕けつのわれにもあ

らぬなる尊靈そんれいも、却かへつてとがめ給たまふべきやと、

こぼるゝをゆるさせ給たまへ萩はぎの露つゆ

廿一日にじゅういちにち日和ひよりよし、大津おほつを出いで、蟬丸せみまるの宮みやへ立たちよれば、朝風あさかぜ梢こずえに聲こゑしてさふくし、

琵琶びわをすぐに關せきのわら屋やの秋あきの風

是こゝより行ゆくこと三里さんりばかりにして、深草ふかぐさの里さとに至いたる、

深草ふかぐさや粟あはも刈かられて片鶉かたうづら

廿二日にじふにち伏見ふしの月枕つきまくらの西にしに白しろめば、旅館りょくゐんをまかんでぬ、これより馬うまを繼つぎかへたりけるに、弱駒よわこまなれば、物ものうばえし、あやまつて膝ひざを折をる、千種ちぐさのしげりなりければ、身みにつゝがはなし、遍昭へんせうが事ことなどおもひ添そへて、前後ぜんごをかへり見みる、

よせひなる落馬らくばなりけり女郎花ぢやうがは

川霧かはぎりいとくらふたちこめて、

川霧やあくび許りか淀の舟

廿三日郡山の御やどりを朝まだき出で行く、西の宮をこえて、一里許ありて、右の山の端に、石の花表見ゆる、猿丸太夫の宮なりけり、さばかりの人と思へば、口ごもりて

猿丸へ手向申さん木の實なり

廿四日兵庫を夜に出る、漸々須磨のほとりに浪白ふ明わたるに、馬の上のねぶりも覺て、

目の覺る須磨の夜明や月もあり

一の谷古戦場にて、

すさまじや海と山とに秋の聲

明石の浦むげに詠捨て、町を二町許入て、右の方へ六七丁行ば、人丸塚あり、風雅のこと共いのり申す序に、

ながくし夜やなかんづく草枕

廿五日故郷の空近ふいたゞき、朝風馬蹄をすゝめていそげば、御迎の誰かれ道々参向す、

軽尻の素鞍に尾花打敷きぬ

槍持も髭をたしなみ、挾箱も肩を忘れて十里の道を多葉粉ともいはず、未晝のかしら城門に柄袋をはづす、

旅に公私あり、旗藏ねざりすて、佛閣の陰に一夜をものし、あるは立とまゐる所々に、往事をおもひ、杖をひく旅にしても、句をもてなぐさむはかたし、しかるに應命のいとま、山川人世の境界を、うかくと見、さる句の妙うれしき事どもなり、殊に舊知芭蕉翁が墓をたづねられしことも、道にふかき志なるべし、遠境はやくも一軸にして、予に見よとのつたへ、子葉子におゐてよく予をしれる人なり、胡馬楚猿のかなしみもなく、無事に歸國のよろこび

を、此に書きそへ侍る、

今頃は何にし秋の月夜敷

沾 徳

其の詩想たるや、實に見るべきものがあるではないか。

彼れ、赤穂籠城の議起るに及んで、舍弟の小野寺幸右衛門、甥の岡野九十郎と共に、卒先身を挺して義盟に就いた、是を聞知したる母の貞立尼の喜び如何ばかり、女でこそあれ、源吾忠雄の母である、深くも是を喜んで、

「此度御身等兄弟叔甥打揃うて、日頃の御恩に報い奉られる事、誠に一門の名譽、かへすくも喜ばしう思ひまする、それに就いて申し聞け置きたき事、余の儀でもおざりませぬ、此の老母が上の事でおざりしますが、女でこそあれ、君に御奉公を存するの志は一つでおざりしまする、御身等幸ひにして上は亡君に背き奉らず下は御先祖を辱しめるが如き事おざりませぬば、母が満足、此の上とてもおざりませぬ、それにつけても、母が行末に心惹かされて、忠義の心を

撓めぬやう、そののみ深く頼みまするぞ」

中に涙を藏めての激勵、源吾を始め幸右衛門、九十郎、感激せざらんと欲するも得ず、宜なる哉、後年袂を連ねて上家へ亂入、梟敵を討つて怨を泉下の君に報せしとは、是に於て源吾の精神は愈々固く、斷固たる復讐の決心は定まつたのである。

彼れ亦資性重厚の人にして、爾來原惣右衛門と其の主張を同うして、京洛に於ける急進派中の一領袖となつたのは、老母の激勵、與つて力あることを疑はぬ。既にして關東關西同志の氣脈を通せんが爲めに、源吾は内藏介の訓令を受け、此の年九月、進藤源四郎と打ち連れ京都を發した。旅路も次第に少なくなつた一日、彼は三島驛にと差掛つた時、過つて馬士が曳いて來た荷馬を驚かした。「オー、お武士、待つて呉んねへ、此の國藏が預つた荷物、それを毀されて黙つちやアおられねへ、何うして呉れるんでへ」

「何うすとは……」

「知れた事よ、元の通りにして返しやアよし、さも無くば此の三島宿、一足だつて通す事アならねへからな」

との無理難題を吹き掛けた。それも其の筈、此の國藏といふのは、當時海道切つての破落漢、一度此奴に因縁をつけられたが最後、何うしても只は濟まされなといふ、厄介至極の悪漢なのである。源吾は確と當惑し、辭を卑うして色々に詫びて見たが、詫びれば詫びるほど、付け上るのが此奴等の慣し、容易な事では承知しさうにもない、仕方がないから源吾は此の仲裁をば本陣へ持ち込んだ、固より本陣でも、此の國藏が悪いとは承知してゐるから源吾を氣の毒に思ひ、様々に國藏を欺しつすかしつすると、

「そんなら一札詫證を入れて、其の上何とか趣意を立て、貫はふかい」

と、金が欲しさの仕事だから遂々本意を吹き出した。處が源吾忠雄、怒るかど

思ひの外、平然として顔色も變へず、

「それで宜いといふのか、然らば重疊忝けない」

と矢立の筆もサラ／＼と、

詫入申一札の事

我等今度下向候處、其方に對して不束之筋有之、馬附之荷物損所出來申候につき、逸々談事之旨尤之次第、大きに及迷惑申候、依て御本陣衆を以詫入、酒代差出申候、仍而一札如件

元祿十四年巳九月

大 高 源 吾

國 藏 どの

と走り書きに書いて、是に金貳分を添へ、國藏に遣はした後、人々に會釋して悠然辭し去つたといふ。誰やらのと同じやうな話

千鈞弩不爲驥鼠發

真しんに源げん吾ごの如ごときは、それであらう。
其その詫わ證じょう文ぶんは、今いま現げんに沼ぬま津つ在ざいの牛うし臥ふせに住すま居まする世せ古こ直ちか道みちといふ人ひとの手て元もとに残のこつてゐるといふことだ。

斯かくして十月じゅうがつ八はち日に江え戸どへ到たう着ちやく、先せん發はつの原はら惣そう右みぎ衛ゑ門もんと共ともに、一きよ舉ぎよの次し第だいを議ぎした所ところ、堀ほり部べ安やす兵へい衛ゑ、奥おく田た孫まご太た夫ふ等らとも意い氣き投とう合がしたので、内うち藏ざう介けの出しゆつ府ぷするに及および、之これを迎むかへて一ひとたび明みやう年ねん三さん月げつの事こと舉あげを要えう決けつさせた。そこで源げん吾ご江え戸どにあること三さん箇げつ月げつ、敵てき狀じやうの偵てい察さつ、同どう志しの協けい謀ぼうを重かね、十二月じゅうにがつ廿にじゅう五ご日にち、原はら惣そう右みぎ衛ゑ門もんと相あ伴たんうて西さい上じやうの途とにつき、翌よく年ねん正しやう月げつ京きやう都とに歸かへり來きた。越こえて九月くわがつ再またび關くわん東とう下か向かう、其その發はつ前ぜん一いち日にち、彼かれは長ちやう文ぶんの一しよ書しよをものして、永えい訣けつの意いを母ははに告つげた、其その一しよ書しよたるや、彼かれの小おの野の寺でら十じゆ内ないが一きよ舉ぎよ決けつ行かうの後のち、妻つま丹たん女によに贈おくつた所ところの書しよと、二ふた大だい名めい文ぶんとして天下てんかに晋あまねく傳でん稱しやうさるゝ所ところのものである。

一、私わたくし事こと今こん度んど江え戸どへくだり申まをぞんねん、かねても御おんものがたり申まを上しあ候けいとをり、

一いすじにとの様さま御おんいさどをりをさんじたてまつり、御おん家いへの御おんちじよくをすゝぎ申まをたく一いち筋すぢにて御おん座ざ候けい、かつは侍さむらいの道みちをもたて忠ちゆうのため命いのちをすて、せんぞの名なをもあらはし申まをにて御おん座ざ候けい、さしての御おんこん意いにもあそばし被くた下され、人ひとなみの私わたくし儀ぎにて御おん座ざ候けいへば、此この節せつたいていに忠ちゆうをもぞんじ、ながらへ候けいて、そもじ様さま御おんぞん命めいのあいだは、御おんやういく仕つかまつり罷まかり有あり候けいても、世よのそしり有あるまじきわれらにて御おん座ざ候けいへども、なまじひに、御おんそばちかき御おん奉ほう公こう相あつとめ御おん尊そんがんはいし奉たてまつり候けい、あさ暮くれの義ぎ、今いまもつてかたときわすれたてまつらず、誠まことに大たいせつなる御おん身みをすてさせられわすれがたき御おん家いへをも思おほ召しめはなされ候けいて御おんうつぶんとげられ候けいはんと、思おほ召しめつめられ候けい相あ手てを、御おんうちそんじ、あまつさへ、あさましき御おんしようがいとげられ候けいだん、御おんうんのつきられ候けいとは申まをながら無む念ねん至し極ごく、おそれながら、その時ときの御おん心しんてい、おしはかり奉たてまつり候けいへば、こつすいとをり候けいて、一日いちにちかたときもやすきこゝろ無む御おん座ざ候けい、されど

も御たんにりよにて時節と申、所と申、ひとかたならぬ御ぶてうほうゆへ、天下の御いきどおりふかく、御しおきに仰付候事に御座候へば、ちからおよび申さぬ事、まつたく天下へ御恨可申上様無御座義にて候ゆへ、御城はしさいなくさしあげ申たる事に御座候、是天下へ對し奉り候て、いぎをぞんじ奉り申さぬゆへにて御座候、併殿様御らんしんとも御座なく、上野介殿へ御いしゆ御座候由にて、御切つけ被成たる事にて候へば、その人はまさしくかたきにて候、主人の命をすてられ候ほどの御いきどおり御座候かたきを、あのおんにさしおき可申様、むかしより、もろこし、我てうともに武士の道にあらぬ事にて候、それゆへ、さつそく、かたきの方へとりかけ可申ところ、大がく様御へいもんにて候へば、御めん被成候時分、もしや殿様御あと、少にても被仰付、上野介殿方へも、何とぞ品もつきて、大學様ぐわいぶんよく、世間もあるばし候様にも罷成候は、との様こそ右之通りに候とも、御家は殘

申事にて候、しかればわれくは出家しやもんと成り、または自がい仕候も、いきどおりはやすめ候はんと、此の節まで口おしき月日をもおくり候所に、そのかひなく、安藝國へ御座被成候、へいもん御ゆるじと申名許にて御座候もつとも、とし月過候は、何とぞ御世に出させられ候事も御座有べく候はんか、よし左様に御座候とても、此節にて、との様御あとはたへ申たる事も御座候へば、此上前後を見合申は、おく病の仕る所、武士の本意ならぬ事にて御座候、此上にも天下へ御せう申上、何とぞあい手かたへ御手あてもくだり、大がく様にも世間ひろく、御とりたて被遊被下候様に一命かけて御なげき申上せひ御とりあげ無くば、その時相手かたへは取かけ可申由、しきりに、そうだんの衆も御座候、尤一理御座候様には候へども、中々さ様のとたうがましき事可仕道理とぞんじ不申候、その上、御ねがひ申あげ、御とりあげ無御座に付、あい手かたへ取かゝり申候だんひとへに、天下へ御う

らみ申上候にひとしく御座候、しかれば、もつての外義、大かく様初、御一門のかたぐ様までも御ためよろしからぬ事にて候故、たゞ一筋に、殿様御いきどをりをはらし奉り候より、外の心無御座候、

一、だんく右申残し候ごとく、武士の道をたて候て、御主のあだをむくひ申迄にて、まつたく天下へたいしたてまつり、御恨申上るにて無御座候、しかれども、いかなる思召御座候て、天下へ御うらみ申上たるも同前とて、われく共のおや妻子へ、御たゞり御座候とて、ちからおよび申さず候、まん一左様の事に成候は、かねて仰られ候とをり、何分にも上よりの御げちの通、じんぢやうに御かくご可被成候、御はやまり候て、御身をわれと御あやまち被成る事など、くれく有まじき御事にて候まま、かならずん左様に御心得可被成候、世の常の女のごとくに、かれ是と御なげきの色の見えさせられ、おろかにおはしまし候は、いかばかり、きのどくに心もひかさ

れ候はんを、さすがつねくの御かくごほど御座被成候て、思召切、かへりて、けなげ成る御すゝめにもあづかり候御事、さてく今生の仕合、未來のよろこび、何事かこれに過申候はんや、あつばれ、われく兄弟は、侍のめうりにかなひ申たる儀と、淺からぬ本望にぞんじ奉り候、さきにての首尾の程、御ころにかけさせられまじく候、私三十一、幸右衛門廿七、九十郎廿三、いづれもくつきやうのものどもにて候、たやすく本望をとげ、ぼうくんの御心をやすめ奉り、未來るんまの金札のみやげにそなへ可申ま、御心やすく思しめし、たゞく御そく才にて、何事も時節を御まち可被成候、御よわひもいとふ御かたぶき被成、いくほどあるまじき御身に、嘸御心ぼそく、便もあらぬかたに、とぼしく月日を御しのぎあそばし候はんとぞんじ奉り候へば、いかばかり心うく候へども、そのだん、ちからおよび不申候、時にのぞみ候ては、生命をそむき、父母をかたにかけて、いか成る山のおく、

野の末にもかくれ、又主君のために、父母の命をもうしなひ申事、義と申ものゝやみがたなきためしにて候、これらの道理くらからぬそもじ様にておはしまし候へども、筆にまかせ申残し候、九十郎母公、お千代へも、よくくは仰きかされ候て、かならずく、おろかにかなしみ申さぬ様に、たがひに御ちからをそへさせられたく候、さひわひかな、御法體の御身にて御座候へば、此後いよくもつて、佛の御つとめのみ候て、うさも、つらさも、御まぎれましく、未來の事、あさ暮に御わすれなく、世もおだやかに御座候は、寺へも節々御まいりあそばし候は、ひとつには、御歩行御ようじやうにも成申べく候、うばにも、あきらめ候様に、よく仰られ候被下候、かしく、

元禄十五 壬午年九月五日

大 高 源 吾

母 御 人 様

しん 上

情理といひ、忠孝といひ、到り盡さるなき此の一書、讀んで爲めに泣かざる者、天下幾人かある、言々一句、肺肝に徹つて、世の不忠不孝なる者、一讀將に愧死すべきである。

さるほどに、大高源吾忠雄は江戸に着府した後、脇屋新兵衛と變名し、南八丁堀湊町に借宅した片岡源五右衛門方に同居して、快舉決行の時機を窺ひ居る間に、即ち天の祐くるところか、豫て堀部安兵衛の懇意にして居る劍道指南の浪人が、偶然にも或る時安兵衛に向つて、

「實は拙者が借屋いたし居る此の家の家主中島五郎作と申す者は、殊の外的好茶家にて、四方庵が門人中でも、やゝ人に知られた數奇者故、折々宗遍に伴なはれ、羽林老が茶會にも出席して、懇命を蒙るとか申し居るでおざるが、是に就いて貴殿、又何等かの御分別もおざらうかと存じ、お耳に入れる」と、所謂天に口なし、人を以て言はしめた、此の四方庵といふのは、山田宗遍